訂正女子國語讀本

巻十

375.9
Yo19
資料室

42154
教科書文庫
4
810
42 1919
200030
1959

資料室

375.9
Y.19

大正八年二月二十日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書

吉田彌平
小島政吉
篠田利英
岡田正美
共編

訂正 女子國語讀本 卷十

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
23588
圖書

東京
金港堂書籍株式會社

四訂 女子國語讀本卷十

目次

一 立太子禮賀表……東京帝國大學……一
◎立太子禮當日の講話……四
二 昭憲皇太后御歌……七
三 月雪花（口語文）……文學博士 芳賀矢一……一一
四 風の音……文學博士 幸田露伴……一九
五 芳宜園大人の靈を祭る……村田春海……二四
六 病院……文學士 大町桂月……二八
◎日本筆道の流派……四五

七　蟷螂の斧（狂歌）……五六
八　國性爺合戰……近松門左衞門……五九
九　七福神……文學博士　小中村清矩……七六
一〇　物忘れ翁の傳……横井也有……八〇
一一　嘉辰令月……和漢朗詠集……八三
一二　光頼卿の參内……平治物語……八四
一三　重盛諫言……平家物語……九三
一四　花のやど（短歌）……一〇五
一五　大原御幸……平家物語……一一一
一六　山吹の花（短歌）（俳句）……一二〇
一七　カイゼルの帝國主義……山口小太郎……一二四

一八　潜航艇とその活動……一三六
一九　水つくかばね（短歌）……一四六
二〇　日本の天職……文學博士　大西祝……一四九

四訂女子國語讀本卷十目次終

廣島大學圖書之印

四訂 女子國語讀本卷十

一 立太子禮賀表

東京帝國大學

東京帝國大學總長理學博士男爵臣山川健次郎謹ミ畏ミテ白ス

天皇陛下今日ヲ生日ノ足日トオボシ定メテ明治天皇ノ萬世ノ常典トオキテ給ヘル立儲令ノマニマニ立太子ノ大禮ヲ行ハセ給フ伏シテ惟ルニ陛下登極ノ大典ヲ擧ゲサセ給ヒシハ去年ノ今月ニシテ四海ノ民皆天ツ日嗣高御座ニ登リマス大御業ヲ拜ミ奉リテ

齊シク國家ノ隆昌ヲタタヘ奉リキ今年ノ今日ハ高光ル日ノ皇子ノ日嗣ノ皇子ニ立タセ給ヒタル大御式ヲ仰ギ奉リテ重ネテ皇室ノ榮福ヲ壽ギ奉ルゾ返ス返スモ尊キソモソモ十一月三日ハ明治天皇ノ御誕辰トシテ國民ノシバラクモ忘レザル日ナリ此ノ日ヲシモ今日ノ御儀ニ擇バセ給ヘルハ

先帝ヲシノバセ給フ御孝心ニコソト推量リ奉ルモ畏シヤ

陛下ノ東宮ニ立タセ給ヒシモ憲法ヲ布キ典範ヲ定メサセ給ヒシ年ノ同ジ月同ジ日ナリキ吉キガ中ノ吉キ日トシテ先例ノメデタサヲ思フニ大御代ノ御榮ヲ祝ヒ奉ル心ハ限ナクノドカナリ伏シテ惟ルニ皇太子殿下英明ニシテ仁慈ノ御心深クオハシマシ常ニ文武ノ師ヲ召シテ專ラ帝王ノ學ヲ修メサセ給ヒ御德御齡ト共ニ進マセ給フ他年萬機ノ政ヲミソナハシテハ

陛下ノ盛德ヲ宣ベサセ給ヒテ皇祖皇宗ノ鴻業ヲ弘メサセ給ハンコト眞澄ノ鏡ヨリモ明ラケクサヤカナリカケマクモ畏ケレドモ

陛下ノ大御心ニモ今日ノ盛儀ヲ如何バカリカ樂シクモウレシクモ思シ召スラン御卽位ノ大典ニ次ギテノ大典トシテ皇室ノ爲ニ國家ノ爲ニ慶賀シ奉ルハ國民七千萬ノ心皆一ツナリ臣等最高ノ學府ニアリテ朝恩ヲ蒙ルコト殊ニ渥ク歡喜ノ心一シホニ切ナリ臣健次郎コココニ本學ノ職員學

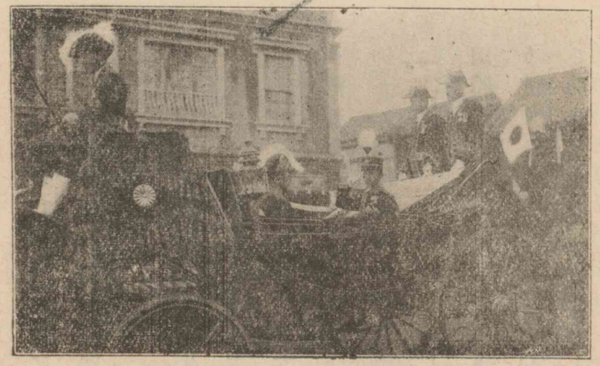
生生徒一同ニ代リ謹ミ畏ミテ御賀ノ詞ヲ白ス

大正五年十一月三日

東京帝國大學總長正三位勳二等理學博士男爵臣山川健次郎

◎立太子禮當日の講話

今日は畏くも宮中に於て立太子の御大禮を行はせられます。それは賢所の大前に於て、天皇陛下より裕仁親王殿下に勅語を賜はり、壺切の御劍を御手づからお授けになるといふおごそかな御儀式であります。裕仁親王殿下は今上陛下の第一の皇子におはします。明治三十四年四月二十九日御誕生あらせられ、今年御齡十六歲、御資性御聰明、御身體御壯健におはします。大正元年七月、今上陛下の御踐祚の御時より皇儲にましします。大正元年九月陸軍歩兵少尉、海軍少尉にならせ給ひ、大正三年十月陸軍歩兵中尉、海軍中尉に御昇任あらせ給ふ。御學事は、大正三年三月まで學習院に御在學、四月に初等科御卒業、其の後東宮御學問所に於て御



裕仁親王殿下宮中へ向はせ給ふ

修學あらせられます。學習院御在學當時の事を洩れ承るに、善く教師の教を守らせられ、熱心に學問に心力を傾注し給ひ、何事をも心ゆくまで御尋ねあり、御復習も正確に遊ばされ、用具の御整頓や規律の御守りも正しくおはしまし、又運動遊戯を御活潑に遊ばされ、動植物採集等の實地研究も、何も〳〵御熱心に遊ばされたと申すこと。又御氣品高尚に、溫和寬厚にましし〳〵、畏多くも梅檀は二葉より馨しと申上げ奉るべき御樣におはしましたと申すこと。其の後、萬に益御上進遊ばすと洩れ承つて居ります。誠に尊い事であります。今日は十一月三日で、明治天皇の御生れ遊ばされた日、今上陛下が立太子の禮のあらせられた日で、誠に由緒深いめでたい日であります。今日の御儀式は賢

所大前では文武高官有爵者を參列せしめられ、天皇陛下には古式の御裝束にて出御、親しく皇祖の大前に御拜禮ありて御告文を奏せられ次いで、皇后陛下御拜あり。次に、皇太子殿下御儀服にて御參入、御拜禮ありて、陛下の御前に參進、陛下勅語を賜ひ、御手づから壺切の御劍を殿下に授け給ふ。

右の賢所大前の儀式に先だちて、宮中三殿に御奉告があり、又、勅使を伊勢神宮及び、神武天皇、明治天皇の御陵に御遣しあつて御奉告の御儀式があり、又、正殿に於て、當日皇太子殿下には兩陛下の御前に參進、謝恩の御詞あり、御盃を賜はりて、御退下あらせらるゝなど、種々の御儀式があります。

抑、我が國は天祖が寶祚無窮の神勅を下し給ひし以來一系渝らず天壤と共に疆なく皇位を繼承し給ふ國であります。今日の御大禮は、この貴き國體が天祖の理想の通りに目の前に現はれて行く所の一つの事實であります。帝國憲法にも皇室典範にも儼然としてそれ〴〵御規定があつて、それが實際に行はれて行く所の史實であります。

要するに、立太子の御儀禮は皇運隆昌の表現であります。國民は滿腔の赤誠を披瀝して奉祝すべきことであります。實際東京を始として各地とも、それ〴〵思ひ〴〵に奉祝の催などあつて、盛に御祝ひ申すさうであります。但、茲に注意すべきは、只形の上で種々の催などをして所謂お祭騷ぎに流れることなく、天祖神勅の旨を畏み、立國の大本を明かにし、我が國體の貴き所以を自覺する、即ち、眞の奉祝の意義を十分に會得し、十分に樂しみ祝ひ、そして、各自の業に勵み本分を盡し、以て無窮の皇運を扶翼し奉らんことを期するのが尤も大切であります。

二　昭憲皇太后御歌

相思ふるもなほせんすべを思らず
書きて人のもとへとなりたれ

ちるのかげをうたてゆるがれ
ひろきにつくをうともがな

みづるづきおもばたまて花櫻
まづちむほどをなほひてづな

おもしきゆはあれどもたゝひふ
かるべはやまねやまとだましひ

かつりみてわるとはず人ゆづきを
たゞしき道たなるまどふらん

いくさまの人ぞほくぶくともむらぎも
こゝろはゆたにあるべらけり

花の面影の忘れがたさも
ほどゝこそ後まで忘れ
あやまちさとりつゝなれども思ひつな
きまゝなほうん和もなき身を
民まはりをいつまでとなほ和れ
そでりも露のこぼれけるかな

三　月雪花

芳賀矢一*

*國文學者、東京帝國大學文科大學教授、文學博士

赫々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の明月休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出づれば、群陰皆影を伏して、大小の有象無象悉く照破されるのであるが、月輪は萬象を一つに包んで貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、皎潔・無垢・崇美と稱ふべきやさしい光である。休息安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰

*荷田蒼生子の歌

藉を感ずる。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帶の椰子の影、寒地の氷の家、眺める人の心心は違ふであらうが、限なく世界を照す月光の、人の胸懷にしみ渡ることは、恰もその影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。「*うちむかふ月は一つの影ながらうかぶは千々の思なりけり」である。

東西古今、悲喜哀歡の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。之を嗟嘆し之を吟詠した詩歌は、世界各國の言語にみちゝて居る。天文學者は云ふ、「月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。」と。この冷たい光

が、古往今來、どれ程の暖みを人間に與へたか、又、與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷たい。その純潔の色を以て貧富貴賤の差別なく、乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや「花(一)ならば咲かぬ梢もまじりなん、なべて雪ふる深吉野の山。(僧仙覺)」なべて降りにし白雪の」といふやうに、眼に入るもの悉く、その下に包まれてしまふ。「(二)三千世界銀成色、十二樓臺玉作層。」の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來る、この純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一

(一)花ならば咲かぬ梢もまじりなん、なべて雪ふる深吉野の山。(僧仙覺)

(二)白樂天の詩句

條の川水を殘して、山といはず、野といはず、またゝく中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々のながめはもとより美しいに相違ない、又、花の散つた後の新綠の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは眞に對照の妙・變化の奇・造化の巧を盡したものではあるまいか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界程樂しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさま〳〵、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としてはあまりに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、馨しい匂さへ有つて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の樣なものの花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花の價を生ずるのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じ樣に一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、いかばかり寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の內にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を愼んだのである。棺槨を飾るにも花を

以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。月雪のながめはその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艶麗・華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ・花やか・花々しい・華美・華麗・華奢等の語は、皆花に基づいた語である。古今東西の詩歌は、擧げるだけ愚である。余は唯花をし見れば物思もなし。といふ古歌を以て、一切を總括し得べしと信ずる。

月雪花三つのながめは、各〻その特長がある。いづれを前いづれを後といふことが出來ぬ。

山櫻、花の下風吹きにけり、
木のもとごとの雪のむらぎえ。

(一)年ふれば齡は老いぬ、しかはあれど、花をし見れば物思もなし。(藤原良房)

(二)康資王母の歌

これは花を雪にたとへたのである。

冬ながら空より花のちりくるは、
雲のあなたは春にやあるらん。

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し、吳山の雪。　沓はかんばし、楚地の花。　肩上の笠には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪を賞でぬ人も無い。」

思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は卽ち人の家である。この地の人には、寸紅の、目を樂しませるものも無い。

(一)清原深養父の歌

(二)謠曲葛城の句

(三)北大西洋中の一島

又、之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見ることがない。瓦斯・電燈の光に不夜城の觀を呈して夜ふけを知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出來ない。われら日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は古人の歷史が加はつて一層の感興が增す。

世々を經てながめし人の數にまた
われをもゆるせ、秋の夜の月。

月は古來の歷史を照す鏡である。

*伊藤仁齋の歌

(一)年々歲々花相似、歲々年々人不同。

(一)唐の劉廷芝の詩句

鬢の霜、頭の雪。人生の感は花を見て益〻繁く、雪を見て愈〻多し。二千五百年以來、月雪花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。（月雪花）

四　風の音

(二)幸田露伴

(二)名は成行、著述家、文學博士

禽の聲は朗かなるが中に和かみありて好く、蟲の音は清きがほかに寂しみありて面白し。其の他、絲竹の音は言ふに及ばず、男女唱歌の聲に至るまで、皆とり〴〵に麗しくもめでたくも耳に響けど、それらはいづれも己がじしたゞ一節

あるのみ。風の音の、或は壯に、或は幽に、或は冴え、或は咽びて、あらゆる趣を兼具ふるには及ばず。

まづ、新玉の年の始の初風の、其の姿は日の旗影に見えながら、其の聲は門の松が枝にも無く、たゞひそやかに注連繩・輪飾を囁かせたる、有るか無きかの音なれど、思ひ做しにや、いと嬉しく聞ゆ。芽出しの柳輕う動きて、櫻の蕾ふつ〳〵と膨らむ頃、暖かき風の稍強く吹くことあり。浪花に貝寄の風と云ふも此なるべく、吾妻には春三番の嵐といふ稱ある、其の一番にも當るべきにや。草木多くは猶葉を出さゞる時なれば、風たゞ蓬々として大空をわたるのみながら、萬物既に春の優しさに潤ひて、石も烟を生ぜんとする折の、岩吹き尖る冬とは自ら違ひて、暴きが中にも何と無く溫かみありて、虻・蜂もこれより羽搏てよ、蛙・田螺もこれより唱へよと、天つ神などの進軍の歌の聲揚げ給ふを、遙か遠き雲の彼方に聞くが如き心地す。

花に醉ひたりし昨日の夢の、今日簾外の青山に覺めて、白磁の小盌に心靜けく新茶を喫する午過の閑居に、庭前の若葉の梢吹きしをる風の音の、獵々・颯々として勇ましきを聞きたる、胸すきて、いさぎよし。天は暖め地は養ひて、氣は加はり物は長ずる頃とて、枝はしなひて折れず、葉は水を含みて柔かなれば、打聞には正しく木の聲ながら、よく味へば、水の聲ありて、或は淙々として響き、或は澎々として鳴る。夏の

嵐の、耳に快く、心に凉しき、一つはまさに此が爲なるべし。朝露濕める幽徑のいさゝむら竹に嵐渡りてさや〳〵と鳴りたる、特に清らにゆかし。竹は布袋竹・四方竹など、風の音好し。眞竹・孟宗竹・大明竹は眼にのみ好し。

秋風の音は人も云ひふるしたれど、疎林に星の夜を騷ぎ、荒野に薄墨の夕を吹く、いづれかあはれに悲しからざらん。長谿霧霽れて崕に這へる葛の葉のざわ〳〵と鳴る初秋、高天雲飛んで黄蘆蕭々と岸に折偃さんとする晩秋、皆人の心を動かし思を惹くに足る。

功遂げ氣藏まりて宇宙凝寂たる冬の日の風こそは凄じけれ。或夜雪を伴つてさら〳〵と紙窓に音づれたる、或日寒威の烈しきに乘じて屋角に叫び徹したる、其等誠に物淋しかれど、椋・欅なんどの高き梢の枯葉拂ひつくして骨瘦せ膚枯びたるに、三更の風緊しく當りたる、時に寐覺の魂魄をのゝかしむ。葉落ちて後は、樹木衞營の氣沈み降りて根に還るものなれば、纖きも太きも、枝々の水は乏しくなりて堅さ自ら加はり、撓み心も少なくなるまゝに、疾風これに當りても、鐵骨太虛に傲り、鋼爪空ざまに張りて、更に屈することなく、千年の闇に立てる怪しき魑魅の、鋭き聲音して何をか歌ふを聞くが如く、樹木の聲の中に金石の聲あるを覺ゆ。おもしろきは猶此に限らず。それ〳〵味ある四季の風よ。禽の聲も物かは。蟲の音も物かは。（洗心錄）

(一)橘千蔭、江戸の和學者。(二)江戸の和學者、(三)賀茂眞淵

五　芳宜園(一)大人の靈を祭る

村田春海(二)

あはれ文化の五とせ九月八日。平春海。謹て芳宜園の大人乃おくつきのみまへに。菊の初花一枝をさゝげ。香たき一ひらを燒て。うやまひつゝしみてまうさく。あはれかなしきかも。君とわれとはよ十といひて一とせのこのかみにおはしなるに。いはそのかみたち世に出給ひしに。君いまはまさかりの齡ひにおはして。我をまづいつくしみてそだてきこゆ。さに縣居(三)の庵に物まなびするゆきかひたまひける時。あしたにゆふべにつどひて。君とみやびのうちかたへまで從ひ。ゆくへにはいつもとてもにつとめて。君のたましひのもとにさそはれて。おしへの事まかりける事。親子はらからもなかりけん。

書よむとては。君を師とたのみ。哥つくるとては。われを友のつらにそなへさせたまひける。中はすくして。君も法の上の道はいとふかく。おもしろ。われも世のさまにかゝづらひて。おの〳〵かくうとくなりゆくをもはゞかるを。君はわれを志をきたまひて後にはわれもおなじくちかきまなびすのはかなきをすゝめては。われ道しるへを別し。月をわたりては。君は舟にあひ乃まうき事ともおほかれへ秘しよ経たひてぞはありつるわざなれども。ひとしこともかたみにへさてなしくなるをかたせる事。今はけさともに初めをくちかへしかぞへれそ。あひ友となる事。すでに五十とせまでぞあまりける。さるを今おくれてまはりていつのせにかあひみん。いつれの

時ときとしては、常ときいと人の身れなるひとしるもの。これをいうてのおきうさんがるをこれをいよくたへんあはをかなしきかも。文の林よりよりおどろへ言の絮れ月日くくくくりゆきるを。於義の翁をよおて。今をすていすへよかへる。

もを雲れるきんへいをもとあ。つきるのあやなるみやひこどくくふくこいへをどくひせを守り。舟はきるつくるもかくこのれはなつきるくよひうれてゆあやしこうがむくくひもおくたすあひてよくくうきくへ人なんまれおすしを。

夫の子りへをおこしてあまもくさをし。底くいさおしいよりもちうき人をもものあくうれおうはなないとほき人をはるかくりなんいおをいすへるりの翁せよ盛りをるくくるい。徐ふ

（一）宋人田ヲ耕スニ者株アリ。田中ニ兎走リテ株ニフレ頭ヲ折テ死スレリ。因ヲ其ノ株ヲ守ルト。兎ヲ復タ得ベカラズ。而シテ身ヲ宋國ノ笑トナル。（韓非子）

（二）楚江ヲ涉ル者アリ。其ノ劍ヲ舟中ニ墜ツ。水ヨリ其ノ劍ノ墜チシ所ヲ遽カニ舟ニ刻シテ曰ク是吾ガ劍ノ墜チシ所ナリト。舟止ルニ非ノ刻セルニ從ヒテ水ニ處リ之ヲ求ム。舟已ニ行キタレド、劍行カザリキ。（呂氏春秋）

きのふは、天かさのせ人のうれひともいふつゐし。ちゝをいうそうをしまげん。かゝをうれうれさせさん。あうれかなしきかも。つのかくことあをするを。泉れきさすもさやうまでこしそ。天うゆまてもほうふみそれさせとかんまうゝ。（琴後集）

六　病院

大町桂月

寒禽の聲絶えて、冬の夜やうゝ更けゆくまゝに、吹きすさぶ木枯の風身にしみて、木々のたゝずまひ怪しく、雲間を縫うて走る片破月かすかなる光をもらして、老松時にをろちの影を横たへ、穂にいでて招きし尾花の床あれて、人目さへ枯れはてたる古池の側、打寄する漣、苦むす巖を嚙みて、餘沫、

*國文家、文學士

落葉の上にさゝやき、爪先あがりの小路、霜柱にとざされて踏むに聲あるも、いとさびし。あはれ、國破れて山河ありと云ひけむ。世に時めきし大守の殿閣既に跡方もなくなりて、遺愛の樹木むなしく榮えぬ。松風よなゝ玉琴の絲に通ひて、木蘭の舟常に幾隊の紅裙を載せけむ、そのかみの豪華、一炊の夢に歸して、烟波なほ愁を含めるに、短籬を隔てたる幾宇の堊壁、呻吟の聲に埋もれて、茲に二豎に苦しめらるる者、いくそばくといふことを知らず。篝燈の影ほの暗くして、廻廊のあたりに跫音あるは、みとりの女の歩むにや。咳嗽の聲手にとる如く聞ゆるにつけても、懷舊の情うたゝ止み難く、九泉の下に眠れる幾多の知己・朋友の茲に病に惱

（一）「國破山河在、城春草木深」（杜甫）

（二）琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをよりしらべそめけむ

みしさま、さやかに目睫の間に浮びいづるを覺えぬ。

一歳、陸奥の歌枕見むとて一人惑ひありきて、二月ばかり過して歸りけるに、はからずも一人の親しき友の病に罹りてこの病院にあることを聞きて、旅裝を改むる暇もなく、車を飛ばせて音なふに、寢臺の上に仰臥して、目とぢ、口ふさがり、顏の色青白くして、體さながら枯木の如く、唯かすかなる一縷の息の通ふばかりなりけり。　こゝらの友どち寢臺を繞りて立ち、友の父もさしぐみて其の側にたてり。　我を見ていたう喜びて、「よくこそ來ましたれ。　日頃君をのみ思ひわたりて、いとゞ心もとなかりしを。」といふ。「けふ、旅よりかへりて、はじめて病に罹りたることを聞き、平生すこやかなる身なればさしたることはなからむ、とて參りたるに、こはそも如何に。」といへば、聲くもらせて、「見らるゝごとく、我が子も今はかぎりとなりぬ。　その病にかゝりしは夏の初にして、下宿屋にては療治し難ければ、この病院に入りたり。　我も捨ておき難くて、遙々故郷よりいで來りて、日夜みとりに力をつくしたれど、病は益〻重くなりゆきて、書繙くことをもとどめられたるに、暑氣さへ堪へがたくて、終日徒然なるまゝに、唯君の身の上を思ひつゞけて、『君だに都にしあらば、つゝみなく打語らひて慰まむものを。　今頃は何處の野邊をかさまよふらむ。　同じく日本の中に住みながら、文だにえ送らぬことの、うたてさよ。』など云ひつゝ、日を送りしほどに、も

と居りし下宿屋にあてゝ出したまへる君の文は屆きぬ。その文に『七日ばかり松島の旅館に滯在せむ。』とあるを見て、やゝ愁眉を開きて『せめて、文に物言はせて、心はやらむ。』さりとても、病重しなど言はゞ、驚きて歸らむも心苦しければ、たゞ微恙にかゝりて病院にありとのみ云ひやらむ。』など、獨言ちつゝ、筆とりて二三行かきてはやすみ、やすみてはまた書きて、二日を經て、またく書終りて、送りけるに、『はや立去りたり。』とて、文は空しく戻れり。」といひさして、せき込む咳嗽の甚だしきに、暫し言葉はとだえぬ。

咳嗽の終るを待ちて、また語りいづるやう、「その後君の文はまた來りたれど、處定まらねば、文送らむ由もなくて、徒らに

思を焦しけるに、君の文は更にまた來りぬ。『こたびは君の在りかもわからむか。』とて、開き見るに、唯八郎湖畔とあるのみなれば、思ひあきらめて、再び筆を取らず。『せめては、君のものしたる水莖の跡を見て、まのあたり君に逢ふ心地すべくなむ。あな、心づくしの世の中や。』とて、君の文を枕邊におきて、朝夕うちながめつゝ心をやりけるに、病は益〻あしくなりゆきて、自ら起たざることをさとりけむ、一日、我に向ひて、『父よ。おのれの病は、もはや癒えざるべし。思ふこと、えし遂げず、御恩の萬一も、え報いずして、殘り多く思ひ侍れど、定命如何ともし難ければ、先だつ不孝の罪はゆるしたまへや。今はの思出に一目なりとも大町に逢ひたく思へど、もはや

*羽後國南秋田郡

筆もえとらず。父上、そのありかを知らせ給はば、速かに歸りこよ、と云ひやりたまひてよ。』と、いふも苦しき息づかひにて、藥の外にはものするものなければ、體は骨と皮とばかりになりて、物いふことも心にまかせざりしを、今朝のほど、重き瞼をひらきて、『大町は未だ來らずや。』といふ。『未だ來らず。』といへば、『あゝ』とばかり歎息の聲をもらして、また一言も發せず。たゞ昏々として睡れり。』といふに、胸ふたがりて、とみにいらへむ言葉はいでず。近寄りて其の名をよべど、答へず。ふたゝびよべど、聲なし。更にまた其の手をとりて、高らかによばはれば、目は開きぬ。されど、唯冷やかなる光を放つのみにて、余の來れることを認め得ざるものの如し。

今朝までも我が名を呼びて待ちわびにきと聞くものを、今我は其の人の眼前にありて、其の人の息はなほかよへるに、竟に言葉をもえかはさず。人生のはかなきこと、一にこゝに至れるか。

その夜、二十二歳を一期として、吹きそめたる秋風に脆くも桐の一葉と散りにけり。嗚呼、學問・才能人にすぐれ、ことさる高等普通科の學校を卒業し、更に專門の學校に入りて學問の蘊奥をきはめむとせし秀才の斯く夭折せしを、誰かは悲しまざらむ。まして竹馬の友とて「大町は未だ來らずや。」といふ一語を絶命の辭とするまでに親しまれしこの身、斯くまで待ちわびられしことをも知らずして、いたづらに

白雲流水の外に放浪せしかと思へば、無量の感慨胸にあまりて、やるかたもなきに、いま枕邊には藥瓶の外、唯わが送りたる文のみあるを見ては、魂も消ゆるばかりになむ。

都にはもたる家なく、親戚の家もなければ、病院の屍室より柩を出して、さる寺にて葬式を行ひけるに、會する者數百人、生花・造花などの贈物は少なかりしかど、讀上げたる弔悼文ども、その數を知らず。平生德望のありしことも知られて、いと盛なる有樣なりけり。彼の父、このさまを見て、「數ならぬ我が子の、かくばかり多かる天下の俊才の知遇を得て、身後猶ねむごろなる追弔をうけぬるは、死して餘榮ありとやいはむ。せめてはこれを土產として、歸りて、老妻に語りて

喜ばしめむ」とて、うれし涙に咽びけるは、理せめて、聞く者袂をしぼらぬはなかりけり。葬式終りて、遺骸は空しく一縷の烟と立去りぬ。あはれ、功成り名遂げて、故鄕に錦着て歸れよと期せし愛子の體、萬卷の書を讀破りて宇宙の眞理を收め得たりしその腦髓、千言またゝくひまに成りて筆端に鬼神を使役せしその手を、唯一片の灰となして、故鄕に持歸りし親の心や如何なりけむ。

年久しく親しみし家の若き夫人の、風邪の心地とて打臥しけるが、病は氣管支にうつり、遂に肺に入りければ、この病院に入りてぞ療治しける。病院に入りし時、國手は診斷して「最早治すべからず。」といへり。されど、夫人は治すべからず

とは知らざりしのみならず、肺をやめることすら知らざりけり。この時なむ年の暮なりける。夫人は云へり「春を迎へなば、我が病は癒えむ。」と。やがて、春を迎へぬ。されど、夫人の病は癒えず。またいへり「梅さく頃に至らば、癒えむ。」と。梅は咲きぬ。されど、病は癒えず。またいへり「櫻さく頃に至らば癒えむ。」と。櫻も咲きぬ。されど、なほ癒えず。かゝりし程に、他に惱むところ出來ければ、手術を受けしに、出血止まず、病勢一頓して、纔かに奄々たる一縷の氣息を存するばかりとはなりぬ。絶え〳〵なる聲して、ありし人々に此の世の暇乞して眼をふさぎけるが、暫くして眼を開き、眸を前後左右に轉じて、あたりに立てる人を見わたして、眼を閉ぢ、又、暫くして眼を開きて、邊の人を見わたせり。かくすること二三回、辛うじて聲を出して「孃は〳〵」といふ。「先に人をやりて呼び參らせたれば、程なく來りたまはむ。」といへば、いと嬉しげに眼をとぢぬ。暫くして、また眼を開きて「孃は孃は」といふ。かくすること、また三四回に及びければ、見るにえ堪へで、車をとばせてその家に至るに、孃の乳母は鏡ども取出でて化粧するさまなり。「速く孃をつれて來よといひこしたるに、一刻も猶豫することやはある。折にこそよれ。夫人の命は刹那もまたぬものを。その額の白粉、水に流して、とく〳〵行きね。」といへば、いたう驚きて、己の化粧は止めて、孃の衣はあれやよけむ、これや相應しからむなどい

ふを「この期に及びて着物を選ぶべしやは。時は一刻も移すべきにあらず、そのまゝにて、はや〳〵。」とて出しやりぬ。一生母の顏をばえ知らざるべき幼女に向ひて、如何なる遺言かありけむ。あはれ、咲きいでたる櫻の花はいまだ散らなくに、夫人の花の姿は早くも無常の風に散りにけり。

其の亡骸の未だ柩に收まらずして、逆屏風の下にありしほど、夫人、平生、銀杏返を好みたればとて、侍女泣く〳〵夫人の髪を銀杏返に結びぬ。鴉鬢蟬鬢、光澤ありてうるはしきことは生前に異ならねど、鸞離れ鳳別れて、幽明界を異にするものを、今更に誰が爲にか粧はむとする。棺中に金氣は禁物なりとて、金の指環は纖手より拔去られて、三途の川の渡賃にとて錢形を捺したる幾片の紙は添へられつ。陰風鬼火を吹いて月魂腥き處、枯殘りたる生花、ありし世の俤をとどめて、一抔の土長く無常の露に霑へり。

又、一人の同鄕のもの、はじめは咽喉を病みて、この病院に入りたるに、更に赤痢といふ病を起して、傳染室に移されぬ。さらでだに在京の日なほ淺くして、病を訪ふもの少なかりしに、傳染室に移りてよりは、とぶらふもの絶えてなかりければ、心細くや思ひけん、年久しく交りたるにはあらねど、われをなつかしがりて、訪ふ毎に名殘を惜しみつゝ、暗涙を催すこともありけり。されど、病は惡しくなりまさりて、國手竟に匕をなげぬるばかりとなりしに、渴を催して堪へ難け

れど、病の爲に惡しければとて、國手、みとりの女を戒めて、小塊の氷だに與ふることを止めけるを、一日我に向ひて、「われ此の世にありて欲しきものは唯一塊の氷になむ。　さるに、みとりの女、固く醫師の命を守りて、いたう我を苦しめぬ。あはれ、君の情もてわれに一塊の氷をめぐみたまはずや。」といふ。「さらば、待ちたまへ。」とて、醫師のもとに行きて、此のことをかたりけるに、「今日までは癒ゆることもやあらむとて、氷を與ふることをとゞめたれど、最早治療の術つきて、その命は旦夕に迫れり。　されば、氷をのまざるも死ぬべく、飲むも亦死なむ。　死は一なれば、氷を與へて暫く其の心のまゝに任せむこそよからめ。」といふに、さなりと思ひて、歸りて、氷塊を與へければ、數多度押戴きて、「金剛石にもまさりて尊くめでたきものは、此の一塊の氷なり。　この氷を賜ひし君の厚恩は、萬劫までも忘れざるべし。　病癒えなば、力のかぎりつくして、報ゆる所あらむ。」とて喜びし甲斐もなく、其の夜、竟にはかなくなりぬ。

此の人氣するどく、心ざま雄々しく、詩に文に牢騷不平の思をよせ、慷慨、世をうれたみて、細事にかゝづらはざる快男子なりしかど、世にありて狡獪をなさしめずとて、天帝早くも五雲閣に召しかへさせ給ひけむ。　悲歌痛飲しつゝ、口角沫を吹きて英雄を罵りし平生の意氣にひきかへて、泣くが如くに唯一片の氷を求むるまでに病みさらぼひし最期の有

様、宛然として目にあり、其の聲もなほ耳朶に殘りて、昨日の如く覺ゆるに、數ふれば、はや一年あまりとなりにけり。あはれ、歳月東流の水に歸して、人生は浮漚に異ならず。末の露、本の雫、後れ先だつ例にはもれぬ人の身の上、歡樂極り易くして、哀情長く忘れ難く、こゝに癒えにし人もこゝらあれど、今つばらに其の名を覺えず。唯果敢なくなりし人のみ思ひ出されて、やる方もなきに、風一きは身にしみて、夜はいたう更けぬ。遠寺の鐘に送られて、いづちゆくらむ、月をかすむる孤雁の聲、いとあはれなり。（帝國文學）

（一）末の露本のしづくや世の中のおくれさきだつたためしなるらん。（伊勢正遍昭）

（二）漢の武帝の秋風辭に「歡樂極つて哀情多し」

◎　日本筆道の流派

文字は誰もよく書かまほしきものなるが、殊に女子はよきが上にもよく書かまほしきものなり。女子の文字に拙きは男子の拙きよりも一きは目立ちてあかず口惜しきものなり。力めて正しき麗しき文字を書かんことを心掛くべきなり。

嵯峨天皇・弘法大師・橘逸勢、この三人を世に三筆といへり。嵯峨天皇は何事にも勝れておはしましゝが、書は弘法大師を師として學び給ひて、時の名筆におはしましき。弘法大師は我が國の筆道の祖と仰がれたり。求法の爲に入唐せし序に、書法を韓方明といふに學びて、その神妙を得たり。筆蹟の今に殘れるものの内にて、風信帖（一）・灌頂記（二）・金剛般若經開題（三）など誠に見事なり。逸勢も大師と共に入唐し、柳宗元といふに就きて書法の蘊奥を究めたり。筆蹟の今に殘れるものは伊都内親王願文（四）のみなり。大師の書逸勢の書は、見事なることは如何にも見事なれども、餘りに雄々しく猛くして、女子の學ばんには適當ならず。

延喜天暦の盛世を經て、藤原氏執政時代に至りて、書風大に更りぬ。從來は專ら唐風のみなりしが、こゝに至りて皇國風の書出來れり。小野道風

（一）京都東寺所藏
（二）山城神護寺所藏
（三）横濱原富太郎所藏
（四）御物

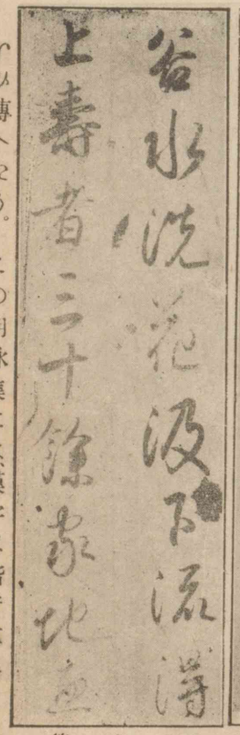
是が創始者にして、藤原行成(カウゼイ)是が大成者なり。道風と行成とこれに藤原佐理(スケマサ)を加へて、世に三蹟(ニセキ)といへり。

道風の筆蹟の内にて最も謹嚴なるものは智證大師(一)諡號勅書なり。悠揚迫らざる趣のあるものは屏(二)風土代(ドダイ)なり。共に行草の漢字もて認めたるものにして、漢字の手本としてはこよなきものなり。

弘法大師帖筆

逸勢願文筆

佐理の筆蹟に詩懷紙(三)あり。極めて見事なるものなるが惜しいかな字數少なし。行成の筆として傳りたるものは、その種類甚だ多し。その内に、本能寺切(四)と稱するものと八月十五夜の詩卷(五)とあり。共に行草の漢字を以て詩文を書きたるものなるが溫厚和順の書風、誠に見事なり。道風の勅書・屏風土代と共にこよなき手本なり。この外に、帝室の御藏にして、曩に審美書院の印行したる和漢朗詠集あり。その筆者の果して行成なりや否やは不明なれども、古くよりしかいひ傳へたり。この朗詠集には漢字は楷行草具はり、假名は諸種の變體



道風筆勅書

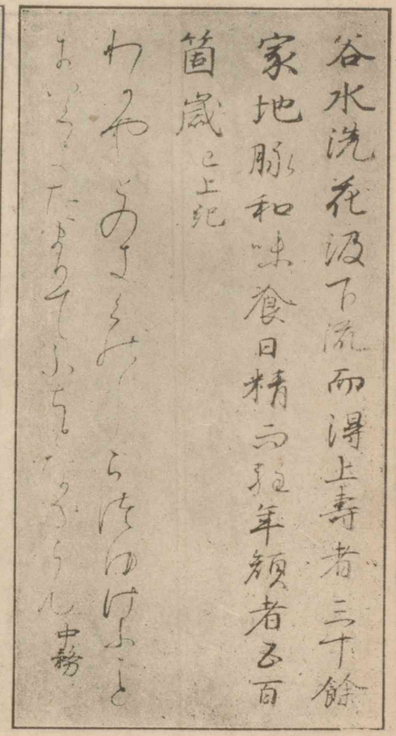
佐理筆詩懷紙

行成筆本能寺切

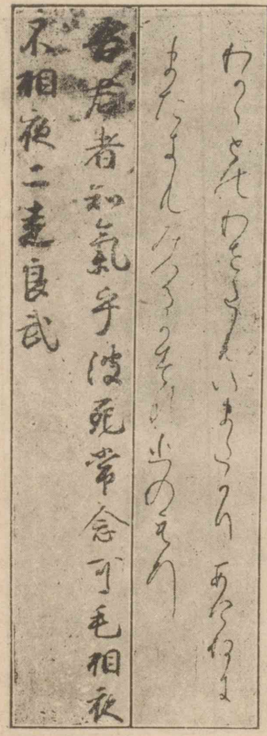
(一)東京伏見宮御所藏
(二)東京井上侯爵所藏
(三)東京松平伯爵所藏
(四)京都本能寺所藏
(五)東京伏見宮御所

具はり、且分量多く、殊にその書風極めて閑雅流麗にして、些の俗氣なく、女子の手本には極めて適當せるものなり。

右の三蹟の外に、紀貫之の書といひ傳へたる古今集と萬葉集と、並に、藤原公任の書といひ傳へたる和漢朗詠集とあり。三者同筆にして、筆者は誰と確定し難けれど、結構やゝ古體に、筆力剛健に、姿態謹嚴にして、威風



傳行成筆　和漢朗詠集



傳貫之筆　高野切古今集　萬葉集

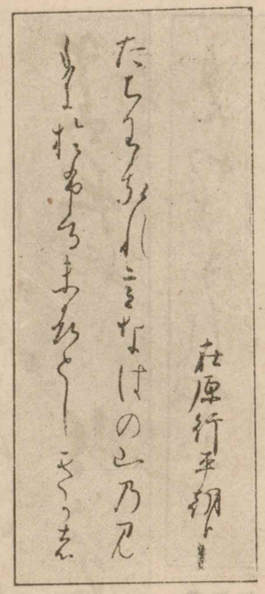
(一)普通に高野切といふ。こゝには殊にその内の秋下の巻と離別の巻との二巻のみをいふ。秋下一巻は横濱原富太郎所藏、離別一巻は東京毛利公爵所藏

(二)御物、桂宮御舊藏、依て普通に什萬葉といふ。々同一物の切をまとめて尾切といふ。

(三)東京赤星鐵馬舊藏

邊を拂ふ樣、他に似るものなし。氣力の乏しき者、筆力の弱き者は學びて以て氣力を養ひ、筆力を養ふべし。たゞ惜しいかな、用筆に側筆逆筆多く、又、悠揚溫雅の態に乏し。溫雅和平を尊しとする女子は、たゞ時々披閲するに止めて足らん。

この外に源俊賴の書といひ傳へたる古今集と貫之集とあり。是をかの御物の朗詠集に比するに、秀麗なることは寧ろ彼に勝り、且頗る才氣の横溢せるを見る。假名の手本としては彼と相並びて無上のものなり。



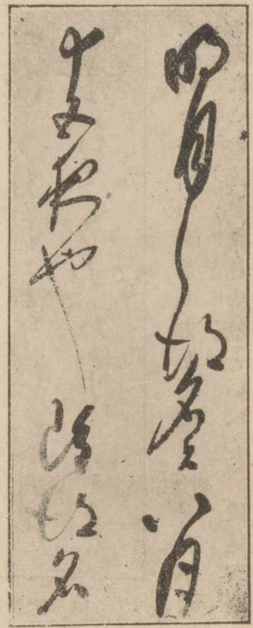
傳古今集　俊顯筆

行成の子孫相繼ぎて書法を傳へ、殆ど我が國の筆道の宗師たる觀ありき。世にこの流を世尊寺流といへり。伏見天皇の第六の皇子青蓮院門跡第十七代の門主、大乘院の宮尊圓法親王、夙く世尊寺第十代の嗣行房につきて筆道を究め給ひしが、後に豐潤端麗なる書を書出し給へり。此の御流

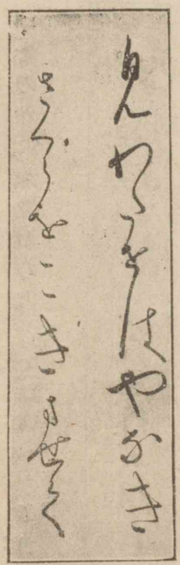
(一)東京二井家所藏元永本といふ。

(二)京都西本願寺所藏十六人集中の紀將作歌集のこと。

を世に御家流といふ。此の流世々青蓮院に傳り、支流も漸く多くなり來りしが、德川時代に至りて幕府之を公文書用に定めたりしかば、是に至りて、山村僻邑、津々浦々、苟くも筆札に從ふ者は皆この流の書を書くこととなりて、こゝに、この流はその極盛に達したりき。



尊圓親王筆



尊圓親王筆

德川時代の初、元和寛永の頃に、山城男山八幡の瀧本坊に松花堂昭乘といふ人あり弘法大師の筆致を悅び年を累ねて學習して、遂に自得する所あり。その書風を稱して大師流といへり。筆力雄健にして、運筆自在なり。されども、今その所謂大師流の書を*見るに、そは單に大師の一面を祖述せるに止り、徒らに波瀾多くして、溫雅和平の趣に乏し。然るに、その假名は大師を

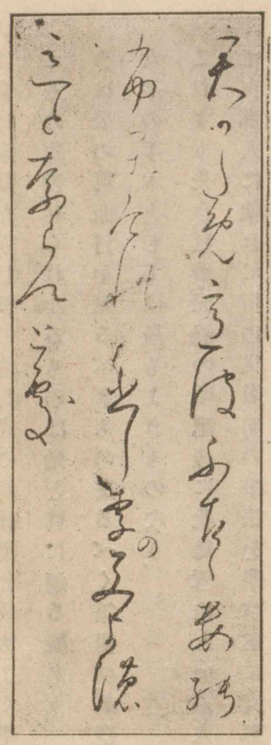
*東京松方侯爵所藏の赤壁賦の如きはその一例なり。

離れて極めて流暢にして明快なり。正にこれ瀧本流（又松花堂流）の眞面目、女子の手本として極めて適當なるものなり。

松花堂筆
赤壁賦　六十四番歌合

六十四番歌合・朗詠抄・色紙・三十六歌仙・色紙等はその尤なるものなり。

百四五十年の後、天明・寛政の頃に至りて、江戸の歌人加藤千蔭この風を學びて、書名一時に高く、その書風を世に千蔭流といへり。千蔭は頗る才筆にして、松花堂の雄健なるところを失ひたる嫌あれども、亦、極めて流暢にして、筆致に捨て難きところあり。



近衞豫樂院萬代帖筆

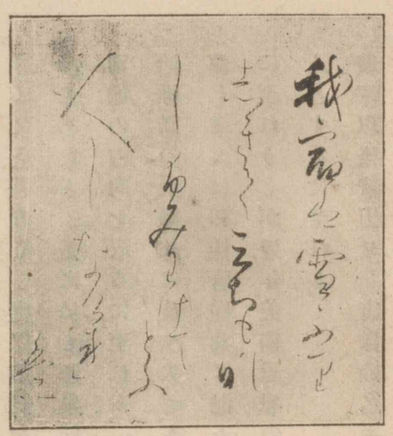
(一)東京益田孝所藏
(二)京都聖仁寺禪居庵所藏。
(三)京都山城國宮野郡仁和寺所藏。

松花堂よりやゝ後れて近衞家熙出でたり。世に豫樂院公といへり。公は當時家藏たりし彼の傳行成の朗詠集を最もよく學ばれたりと覺しくて、その臨書せられたるものは、殆ど眞に逼る觀あり。秋聲賦萬代帖の如きは、公の眞面目を見るべきものなるべく、筆暢び氣穩かに、心正しくして、女子の手本としては最もよきものなり。

これより先き、延寶・元祿の頃、肥後に北島雪山といふ人あり。長崎に行きて、支那人に就きて明の文徵明の筆法を學び、遂に支那風の書の妙域に達したり。江戸に來るに及んで、細井廣澤等之に學び、是より支那風の書漢學者の間に傳播して、遂に唐樣の名起るに至れり。抑〻大師・逸勢等の傳へたりし書風は彼の國の唐朝の風なりしが、唐朝は、太宗以來、晉の王羲之の書風を尊重したりしかば、二人の傳へたりし書風も亦羲之の書を宗としたるものなりき。道風出づるに及びて、唐朝の剛健の風を去りて、穩健にして端麗なる皇國風を加へ、こゝに和樣の一流を創始したりき。されば、我が國の書風は世尊寺流・御家流を經て、なほ羲之の遺風を存したりしなり。然るに、支那に於ては、宋元以來、事々物々大變革をなし、書に於ては、羲之の書風全く地を拂ふに至れりと傳へらる。加之、我が國に舶載し來りし支那人の筆蹟の如きは、多くは粗惡なる墨帖のみなりきと覺しく、爲に我が國人は書は只氣魄と筆勢とのみを主要とするものと誤信し、自らも疎宕・奇怪なるものを揮灑して得々とし、又、一方に、我が國の書の、流傳久しきに渉りたる結果、漸く卑俗に陷り來れるを見て、之を和習と稱して排斥すること甚だしく、從學の徒をして成るべく和習を帶びざらんやうに勉めしめたり。是に於て、源泉同一なりし彼我の書は全く相乖離して、遂に別途の方向を取るに至れり。かゝりし程に、天下騷然として擾れ、遂に明治維新の大變革に及び、次で、泰西の洪濤澎湃として寄せ來りて全國を流蕩し、こゝに和樣唐樣共に泥土に委せられてまた一顧眄を與ふる者なきに至れりしが、近年美術思想の復興するに伴ひて、やうやく頹勢を挽回せんとするに至れり。

廣澤以後輩出せし唐樣の名手、その名一々列記し難し。維新前に名高かりしものは卷菱湖・市河米庵・貫名海屋(後に、菘翁)等、明治年間に於て著名なりしものは長三洲・巖谷一六・日下部鳴鶴・中林梧竹等なりき。この内、菱湖・

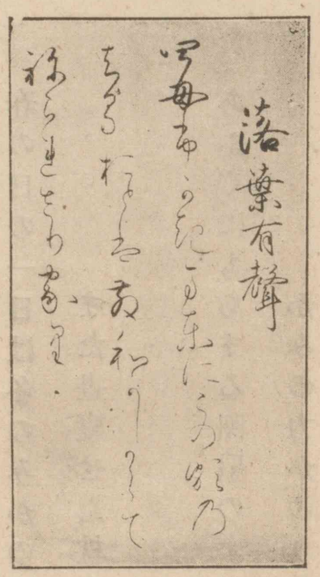
海屋・及び三洲は唐人を宗とし、米庵は宋人を宗としたりしが、一六・鳴鶴・梧竹は唐以前の所謂六朝の風を宗とせり。



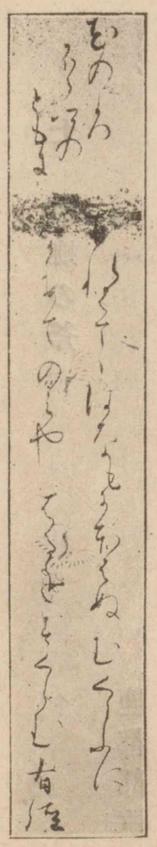
多田親愛筆

和様は維新以後三條實美公の庇護の下に辛うじて命脈を保ち來りしが、近來やや氣勢を昂げ來れり。故人にては、世尊寺の流を汲みし多田親愛維新以後第一の名手と稱せられ、高崎正風・植松有經また假名をよくせり。

こゝに、試みに眼を轉じて書家の所作を觀よ。唐様家の主とする所は漢詩文を扁額掛物・又は、屏風等に揮灑するに在り、和様家の主とする所は和歌・和文を色紙・短冊・或は、卷物に認むるに在り。是を以て、唐様家は漢字を書くことを得れども、假名を書くこと能はず、和様家は假名に巧なれども漢字に拙し。從來の書家皆此の如く、現在の書家も亦然り。然るに、我々現在の日本人は漢詩文のみを書きえて足るべからず、また假名のみを書きえて足るべからず。我々は、よし漢字には幾分拙なりとも、又、よし假名には幾分拙なりとも、漢字と假名とをば共に同じほどによく書きえざるべからず。果して然らば、我々はもはや唐様の師につきて漢字のみを習ふべからず、又、和様の師につきて假名のみを習ふべからず。我々は須らく、適當なる漢字とこれに相應すべき假名とを選び求めて、共に之を習はざるべからず。



高崎正風筆



植松有經筆

但し、女子は男子に比して假名を用ふること漢字よりも多し。されば、女子は漢字は甚だしく見劣のせざる限りに於て書き、假名は漢字との調和

を破らざる限りに於て麗しく書かんことを力むべきなり。女子は心のすなほにしてうるはしきを德とす。和樣の溫和なるはその心なるべく、假名のなだらかなるはその姿なるべし。

七　蟷螂の斧

春の日の一日は冬のみかの原、　鹿都部眞顏

また晝寢せん、枕かせ山。　宿屋飯盛

あふぐにもあまる團扇のすゞかぜは

かみの力か、のりのたすけか。　栗柯亭木端

世の中は何のへちまと思へども、

ぶらりとしてはくらされもせず。　倉部行燈

及びなき事ばかりにて、蟷螂の

おのがまゝにもならぬ世の中。　宿屋飯盛

いかで、われ、項羽の力もちの夜に

月のかくるゝ山を拔かまし。　四方赤良

*かくばかりめでたく見ゆる世の中を、

うらやましくや、のぞく月影。

*かくばかり經がたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな。（藤原高光）

ぬば玉の木の下闇の黑米も、
つきいでてこそしらげそめけれ。

讀人不知

心なき身にも涙はこぼれけり、
あくびのあとのあきの夕暮。

紀定丸

*心なき身にもあはれは知られけり鴫たつ澤の秋の夕暮。（西行）

駿河國、原の宿にて

浮島がはらふ路銀もつきはてゝ
三國一のふじゆうな旅。

平秩東作

ぢいは山へしばしが程に身は老いて、

鯛屋貞柳

むかし〳〵の話こひしき。
この世をばどりやおいとまにせんかうの
けむりと共にはひさやうなら。

十返舍一九

汗水を流してならふ劍術の
役にも立たぬ御代ぞめでたき。

元杢網

八　國性爺合戰

五常軍甘輝館の場

近松門左衛門

*元祿時代の戲曲作者

表に轟く馬・車、御歸館と呼はつて、唐櫃先に舁入れさせ、いういうたる絹笠も、さすが五常軍甘輝と名におふ其の物體。

錦祥女出迎ひ「何とて早き御退出。御前は何と候ぞや。」「されば〳〵。韃靼大王叡感深く過分の御加增、十萬騎の旗頭散騎將軍の官に任ぜられ、諸侯王の冠裝束賜はり、大役仰せ付けらるゝ。家の面目これに過ぎず。」と有りければ、「それはお手柄。めでたい〳〵。ナウ家の吉事は重なるもの。日來戀しい、ゆかしいと申し暮らせし父上、日本にて設け給ひし母兄弟、賴みたき事ありとて、門外まで來り給へども、お留守といひ、嚴しき國の掟を憚り、男子は皆還し、母上ばかりを留置きしが、猶も上の聞えを恐れ、繩をかけて、アレあの奥の亭にて御馳走は申せども、胎内借らぬ母上、繩かけし御心底。悲しさよ。」とぞ語りける。

「ムウ繩かけしはよい了簡。上へ聞えて言譯あり。隨分饗せ。いざ先づ我も對面せん。案内申せ。」といふ聲の、漏聞えてや、妻戸の内、「ナウ錦祥女。甘輝殿のお歸りか。爰は餘り高あがり。わらはそれへ。」と、立ちいづる、形はいとど老木の松のしめからまれし藤葛、起居苦しきその風情。甘輝見る目もいたはしく、「誠世の中の子といふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ、その甲斐もなき縛は、時世の掟、是非もなし。ソレ女房、お手が痛むか、氣を付けよ。優曇華のまれ人、いささか麁略を存ぜず。何事なりとも此の甘輝が身に相應の事ならば、必ず心置かるな。」と、世に睦じくもてなせば、老母顏色うち解けて、「オヽ賴もしい、忝ない。其の詞を聞くからは、

何しに心置くべきぞ。　賴み入りたき大事密かに語り申したし。　これへ〳〵。」と小聲に成り「ナウ我々此の度唐土へ渡りしこと、娘ゆかしいばかりでなし。　去年の初冬、肥前の國松浦が磯といふ所へ、大明の帝の御妹梅檀皇女小船に召され、吹流され、御代を韃靼に奪はれし御物語。　聞くとひとしく、父は素より明朝の陪臣。　我が子の和藤内と申す者、賤しき海士の手業ながら、唐土・日本の軍書を學び、韃靼大王を亡し、昔の御代に飜し、姫宮を帝位に卽けんと、先づ日本に殘し置き、親子三人此の唐土へは來たれども、淺ましや草木まで皆韃靼に隨ひ靡き、大明の味方に志す者一人も候はず。　和藤内が片腕の味方に賴むは甘輝殿。　力を添へて下されかし。　偏に賴み參らする。」　是が拜む心ぞ、と額を膝におしさげ〳〵、唯一筋の志思ひ込うでぞ見えにける。

甘輝大に驚き、「ムウさては聞及ぶ日本の和藤内と申すは、この錦祥女とは兄弟、鄭芝龍一官の子息候な。　ムヽ武勇の程唐土までも隱なく、賴もしき思立、尤も斯うこそ有るべけれ。我等も先祖は大明の臣下。　帝亡び給ひてより賴むべき主君なく、韃靼の恩賞蒙り、月日を送る折柄、望む所の御賴。　早速味方と申したきが、少し存ずる旨あれば、急にあつとも申されず。　とつくと思案し、御返事を。」といはせも果てず、「アウそりや御卑怯な。　詞が違ふ。　是程の一大事、口より出せば、世間ぞや。　思案の間に漏聞えて不覺を取り、悔んでも返ら

ず。お恨とは思ふまじ。成れ成らざれ、お返事を、サア唯今。」とせめつくれば、「ムウ急に返答聞きたくば、易い事〳〵。いかにも五常軍甘輝和藤内が味方なり。」といふより早く、錦祥女が胸元取つて引寄せ、劍引拔いて咽笛に指當つる。老母あわてゝ飛掛り、二人が中へ割つて入り、持つたる手をふみ放し、娘を背中に押遣り〳〵、仰向に重なり臥し、大聲上げて「是、情なや。何事ぞ。人に物を賴まれては、女房を刺殺すが唐土の習か。心に染まぬ無心を聞くも女房の緣ある故と心腹が立つてのことか。但しは狂氣か。偶始めて來て見たる母親の目の前で殺さうとする無法人。日比が思ひ遣られた。味方をせずば、せぬまでよ。今までと違うて、親の有る大事の娘。コレ恐いことはない。母にしつかと取りつきや。」と隔ての垣と身を捨てゝ、かこひ歎けば、錦祥女、夫の心は知らねども、母の情の有難さ、「怪我遊ばすな。」とばかりにて、共に涙に咽びけり。

甘輝飛びしさつて「オヽ御不審御尤。全く某無法にあらず、狂氣にも候はず。昨日韃靼王より某を召し、此の比、日本より和藤内といふえせ者、小僕下劣の身を以て、智謀軍術逞しく、韃靼王を傾け、大明の世に飜さんと、此の土に渡る。彼が討手誰ならんと數千人の諸侯の中より、此の甘輝を選出だされ、散騎將軍の官に任じ、十萬騎の大將を賜はる。和藤内を我が妻の兄弟と、今聞くまでは、夢にも知らず。彼奴日本

に傳へ聞く楠とやらんが肝膽を出し、朝比奈・辨慶とやらんが勇力あるとも、我また孔明が腸に分入り、樊噲・項羽が骨髓をかつて、一戰に追つて追捲くり、和藤内が月代首ひつさげて來らんと廣言吐きし某が、一太刀もあはせず、矢の一本も放さず、ぬく〳〵と味方せば、五常軍甘輝が日本の武勇に聞きおぢする者でなし、女に絆され緣にひかれ、腰が拔けて、弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雜口にかけられんは必定。然らば、子孫末孫の恥辱脫れがたし。恩愛不便の妻を害し、女の緣にひかれざる義信の二字を額にあて、さつぱりと味方せん爲。ヤイ錦祥女。留むる母の詞には慈悲心こもり、殺す夫の劍の尖には忠孝こもる。親の慈悲と忠孝とに命を

捨てよ、女房。」と、理非を飾らぬ勇士の詞。「オヽ聞分けた。身に叶うた忠孝。親に貰うた此の體、孝行の爲に捨つるは惜しいとも思はぬ。」と、母を押しのけつつとより、胸押明くれば、引寄せて、見る目危き氷の劍。「ナウ悲しや。」とかけ隔て、押別けんにも、詮方なく、退けんとするに、手は叶はず。娘の袖に喰付いて引退くれば、夫が寄る、夫の袖をくはへてひけば、娘は死なんとまた立寄るを、口にくはへて唐猫の塒を替ふる如くにて、母は目もくれ身も勞れ、わつとばかりにどうと伏し、前後不覺に見えければ、錦祥女縋り付き、「一生に親知らず、つひに一度の孝行なく、何で恩を送らうぞ。死なせてたべ、母上。」と、くどき歎けば、わつと泣き、「ナウ悲しいこと云ふ人や。

殊に御身は娑婆と冥途に親三人。殘り二人の父母は產落した大恩有り。中に一人の此の母は憐み懸けず恩もなく、うたてや、繼母の名は削つても削られず。今爰で死なせては、日本の繼母が三千里隔てたる唐土の繼子を惡んで、見殺に殺せしと、我が身の恥ばかりかは、普く口々に日本人は邪慳なりと、國の名を引出すは、我が日本の恥ぞかし。唐を照す日影も日本を照す日影も、光に二つはなけれども、日の本とは日の始、仁義五常情あり、慈悲專らの神國に生を享けた此の母が、娘殺すを見物し、そも生きてゐられうか。願はくは、此の繩が日本の神々の注連繩と顯はれ、我を今絞殺し、屍は異國に曝すとも、魂は日本に導き給へ。」と聲を上げ、道もあり、情もあり、哀れも籠るくどき泣き、

錦祥女は縋り付き、母の袂の諸涙。甘輝も道理に至極して、坐ろ涙にくれけるが、稍有つて、甘輝席を打つて「ハツア是非もなし、力なし。母の承引なき上は、今日より和藤內とは敵對。老母をこれに留め置き、人質と思はれんも本意ならず。輿、車用意して所を尋ね、送り還し參らせよ。」「イヤ送るまでもなく、此の遣水より黃河まで、吉き便には白粉流し、叶はぬ知らせは紅を流す約束にて、迎ひにお出で有る筈。いで紅といて流さん。」と、常の一間に入りにけり。

母は思にかきくれて、思ふに違ふ世の中を、立歸りて夫や子に何と語り聞かせんと、思ひやる方なみだの色、紅より先の

唐錦。錦祥女は其の隙に、瑠璃の鉢に紅溶入れ、是ぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる名殘は今ぞ」と、夕波の泉水にさら〳〵。落瀧つ瀨の紅葉と、浮世の秋をせきくだし、共に染めたる泡沫の紅くゝる遣水の、落ちて黃河の流の末。和藤內は巖頭に簑打ちかづき座をしめて、赤白二つの川水に心を付けて水の面「南無三寶、紅が流るゝ。さては望は叶はぬ。味方もせぬ甘輝めに母は預け置かれず。」と、踏出す足の早瀨川、流をとめて行先の堀を飛びこえ塀を乘りこえ、籬・透垣踏破り、甘輝が城の奧の庭、泉水にこそ着きにけれ。

先づ母は安穩、嬉しやと飛上り、縛の繩引きちぎり、甘輝が前に立ちはだかり、「五常軍甘輝といふ髭唐人は和主よな。天にも地にもたつた一人の母に繩かけたは己を己と奉つて、味方に賴まんためなるに、もつてうすれば方圖もない。味方にならぬは、此の大將が不足なか。第一女房の緣と云ひ、其方から從ふ筈。サア日本無雙の和藤內が直に賴む。返答せい。」と柄に手をかけ突立つたり。「オヽ女房の緣といへば、猶ならぬ。御邊が日本無雙なれば、我は唐土稀代の甘輝。女に絆され味方する勇士にあらず。女房を去る所もなし。病死するまでべん〳〵とも待たれまい。追風次第、はや歸れ。但し、置土產に首がおいて往きたいか。」「イヤサ日本の土產にうぬが首を。」と、兩方拔かんとする所を、錦祥女聲をかけ、「アヽ〳〵是ナウ病死を待つ迄もなし。唯今流せし紅の

水上を見給へ。」と、衣裝の胸を押開けば、九寸五分の懷劍、乳の下より膽先まで横にぬうて指通し、朱に染みたる其の有樣。母は是はとばかりにて、かつぱと伏して、正體なし。和藤內もどうてんし、覺悟を極めし夫さへ、坐ろに驚くばかりなり。錦祥女苦しげに、「母上は日本の國の恥を思召し、殺すまいとなさるれど、我が命を惜しみて、親兄弟を貢がずば、唐土の國の恥と、斯うなる上は、女に心ひかさるゝ、人の誹はよもあるまじ。ナウ甘輝殿。親兄弟の味方して、力ともなつてたべ。父にもかくと告げてたべ。もう物いはせて下さるな。苦しいわいの。」とばかりにて、きえ〳〵とこそ成りにけれ。甘輝涙を押しかくし、「オヽでかいた〳〵。自害を無にはさせまい。」と、和藤內が前に頭をさげ、「某先祖は明朝の臣下。進んで味方申すべき身の、女の緣に迷ひしと俗難を憚りしに、我が妻唯今死を以て義を勸むる上は、心淸く御味方。大將軍と仰ぎ、諸侯王に準へ、御名を改め、延平王國性爺鄭成功と號し、裝束めさせ奉らん。」と、武運開くる唐櫃の、二重の錦、羅綾の袂、緋の裝束、章甫の冠、花紋の沓、珊瑚・琥珀の石の帶、莫耶の劍金をみがき、絹笠さつと指しかくれば、十萬餘騎の軍兵ども、幢の旗、幡の旗、吹拔・たて鉾・弓・鐵炮・鎧の袖を列ねしは、會稽山に越王の再び出でたる如くなり。母は大聲高笑ひ、「アヽ嬉しや、本望や。あれを見や、錦祥女。御身が命を捨てし故、親子の本望達したり。親子と思へど、天下の本望。此の劍

は九寸五分なれど、四百餘州を治むる自害。此の上に母が存へては、始の詞虚言となり、再び日本の國の恥を引起す。」と、娘の劍をおつ取つて、咽喉にがばと突立つる。人々是はと立騒げば、「アヽよるまい〳〵。」とはつたと睨み、「ナウ甘輝、國性爺。母や娘の最後をも必ず歎くな、悲しむな。韃靼王は面面が母の敵、妻の敵と思へば、討つに力有り。氣をたるませぬ母の慈悲。此の遺言を忘るゝな。父一官がおはすれば、親には事を缺くまいぞ。母は死して諫をなし、父は存へ教訓せば、世に不足なき大將軍。浮世の思出これまで。」と、肝のたばねを一ゑぐり切りさばき、「サア錦祥女。此の世に心殘らぬか。」「何しに心殘らん。」といへども、殘る夫婦の名殘。親子手を取り引寄せて、國性爺が出立を見上げ見下し、嬉しげに、笑顔を娑婆の形見にて、一度に息は絶えにけり。

鬼を欺く國性爺、龍虎と勇む五常軍、涙に眼は眩めども、母の遺言背くまじ、妻の心を破らじと、國性爺は甘輝を恥ぢ、甘輝は又國性爺に恥ぢてしをるゝ顏かくす、亡骸をさむ道の邊に、出陣の門出と生死二つを一道の、母が遺言、釋迦に經、父が庭訓、鬼に鐵棒。討てば勝ち、攻むれば取る。末代不思議の智仁の勇士。玉有る淵は岸破れず、龍栖む池は水涸れず。斯かる勇者の出生す、國、國たり、君、君たる、日本の麒麟是なるはと、異國に武德を輝しけり。

九　七福神

小中村清矩[一]

或人、七福神てふ者の謂れを問ふに、己答へけらく、「その神たちを分ちていはば、三くさなるべし。そは福祿壽とて異樣の形なせるものは、樣々のさちを與ふる由の名にて、正しくは壽星・又は、南極星といふものなりとか。壽老人はた、同じたぐひにして、老人星とも云へれば、この二つは共に漢土の道家に司命星と唱ふるものなるを、かゝる樣にかきなして、早うかの國にもてはやせるならん。

さて、辨天[三]はまたの名を宇賀神といひ、毘沙門は梵語なるを翻して多聞天王といふ。共に佛經より出でたるは云ふも更にて、布袋は漢土明州の僧なるが、本の身は彌勒[四]なりといひ傳へたれば、この三つは釋門なり。

又、惠比須は蛭兒とも三郎ともいへば、かの蘆舟[二]に入れて流しけんものの形をかくざまに作りなしたるものならんを、事代主神とも彦火火出見命ともいひなすは、なか〳〵にやあらん。西[三]の宮に祭れるはいと古し。

大黑といふは、梵語の摩訶迦羅の對譯にて、僧家の廚子に袋を負ひて黑みて立てる像、是なり。是を、又、我が國作の神なり

(一)國學者、故實家、文學博士、明治二十八年歿す。
(二)印度神話中の女神の一、辨才天。
(三)四天王の一、北方の守護神。
(四)彌勒菩薩。

寶船

(一)古事記に「伊邪那美命御子蛭子を生みたまひき。この御子は葦船に入れて流しすてつ。」
(二)攝津國武庫郡にあり。

といふは、大國主と大黑天と音の通ひたるより思ひ寄せ、又、かの神の袋を負ひ、鼠に助けられ給ひし古事をも取合せたるにて、いつしか打出の槌、二つの俵をさへ添へて、金穀の幸與ふるを示すこととなりぬるにや。　されど、この二つは少しく神典に由あれば、暫く我が國の者と見做しつべし。

かく異樣なる物どもを取合せて、幸の神とも云傳へたるは、いかなる由にかと思ふに、こは足利の世の半より後、世に名ある畫師の、禪家の僧と語らひ、諸人のもて崇むるものを集へ、その形に心しらひて、をかしく書きそめしより、遂には世にひろまりて、この神たちをねぎまつりて、異なる幸を得んと、もて崇むる輩さへも多くなれるぞかし。といへば、「さりけり〳〵。　かの瀟湘の八景も、その初は禪僧の詩の題として作り始めけんを、うつし畫の上にも移りて、世に廣くなりぬるなめれば、七福の神の初もその類ひならんと思はれて御說言の諸はるゝなり。　抑、今の世の學者のさまを見るに、洋服を著飾り、革表紙の書をまさぐりて、『世は只權利義務こそあれ。』と、我たけく論ずるもあれば、烏帽子直垂かいつくろひて、『古へは神隨に世はよく治りたるに、異國の敎の盛になりしより、萬慨たくもなりぬるものかな。』と唱ふるもあり。又、殊更に垢づきたる羽織打着て、袴のひだ正しくとり、仁といひ義といふとき言に心つくすも見ゆめり。　かゝる人たちを一つ席に集へて、かの幸の神のされ畫の如く、酒汲交し、

瀟湘八景
江天暮雪
山市晴嵐
遠浦歸帆
遠寺晚鐘
平沙落雁
漁村夕照
洞庭秋月

ゑらぎ遊ばしめんには、いかに見る目さへも樂しからん。」などそゞろ言せるを、さながら書きつく。（陽春廬雜考）

一　物忘れ翁の傳

横井也有

わすれ草生ふる住よしのあたりに住みわびたる物忘れの翁ありけり。さるは、健忘などいへる病のすぢにはあらで、たゞ身の愚に生れつきて、物覺えのおろそかなるにぞありける。昔は、經學の道をも問聞き、作文・和歌の席などにも、さそふ人あれば、まじらひけれど、聞くこと習ふことの、さすがに面白しと思ふものから、夕べに覺えしことゞも、朝ぼらけには漕行く舟の跡なくて、身にも心にも殘ること少なし。

（一）尾張藩士、俳人俳文家、天明三年歿す。

（二）土佐日記に「住の江に舟さしよせて、忘れ草、しるしありやとつみて行くべく。」

（三）拾遺集に「世の中は河にたとへん、朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白波。」

されば、これを書きつけおかんと、強ひて机に凭れば、春の日は蝶鳥に心浮かれて過ぎ、秋の夜は蟲なきて、いとねぶたし。かくてぞ、老蘇の森の草、かりそめの人の約束も、小指を結び、手のひらにしるしても、行く水にかず書くはかなさ、人も笑ひて罪許しつべし。されば、その翁のいへりける、「身のとりどころなきを思ふに、若きにかずまへられし程は、人やりならず恥しかりしが、つんぼうの雷に騷がず、座頭の蛇に驚かざる、こぼれざいはひなきにもあらず。世の常の茶飲談も、はじめ聞けることの耳に殘らねば、世に板がへしといふ語ありて、又かの、大阪陣かと若き人々はつきしろひて小用にも立つがなかにも、我は何がし僧正の時鳥ならねど、聞く度

（一）近江國蒲生郡にあり。

（二）金葉集に僧正永緣が歌「聞く度にめづらしければ、ほとゝぎす、いつも初音の心地こそすれ。」

に珍しければ、げにと聞くかひある翁かなと、語る人は心ゆきても思ふべし。まして、常に手馴れふるしゝ文章・物語の册子も、去年見しことも、今年おぼえず、春よみし文は秋たどたどしく、またも繰返し見る時は、たゞ新なる文に對ふ心地して、あかず。幾度もおもしろければ、わづか兩三帙の書籍ありて、心の樂更に盡くることなし。昔、炎天に腹を曝したるをのこは、人にもをり〳〵ものを問はれて、とりまがはしいひたるべし、と思ふに、如何にかしましき心かしけん。今は、なか〳〵嬉しき物忘れかな。」とぞいひける。尚かの翁が家の集に、何の本歌をか取りけるならん、

(一)忘れてはうちなげかるゝ夕かなと、

(一)郝隆の故事。

(二)新古今集「わすれてはうちなげかるゝ夕かなわれのみ知りてすぐる月日を」(式子内親王)とあり。

ものおぼえよき人はよみけん。（鶉衣）

二　嘉辰令月

和漢朗詠集

雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を被て立つて徘徊す。

遺愛寺の鐘は枕を欹てゝ聽き、香爐峰の雪は簾を撥げて看る。

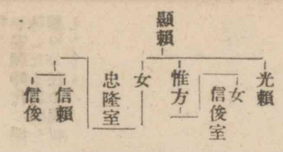
刑鞭、蒲朽ちて、螢空しく去る。諫鼓、苔深うして、鳥驚かず。

嘉辰令月、歡極りなし。萬歳千秋、樂み未だ央ならず。

長生殿の裏には春秋留れり。不老門の前には日月遲し。

*平安朝時代に朗詠したる詩歌を藤原公任の編輯したるもの。

(一)鎌倉時代の軍記
(二)二條天皇平治元年十二月十九日
(三)藤原氏
(四)右衛門督藤原信頼



一三　光頼卿の參内

平治物語

さる程に、内裏には同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不參にておはしましけるが、「參内して承らん。」とて、殊にあざやかに束帯引繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩きたまひ、めのとごの桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雜色の裝束に出立たせ、「自然の事もあらば、人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。」とて、御身近く置き、その外、清げなる雜色四五人召具して、大軍陣を張りて處々門々を堅く守護しけるを事ともせず、さき高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大に恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて、通し奉る。

紫宸殿の後を經て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上臈たち皆下にぞ着かれたる。光頼卿、「こは不思議のことかな。人はいかに振舞ふとも、かれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には着くまじきものを。」と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましける

(一)藤原氏
(二)宰相は參議の唐名、定員八人。

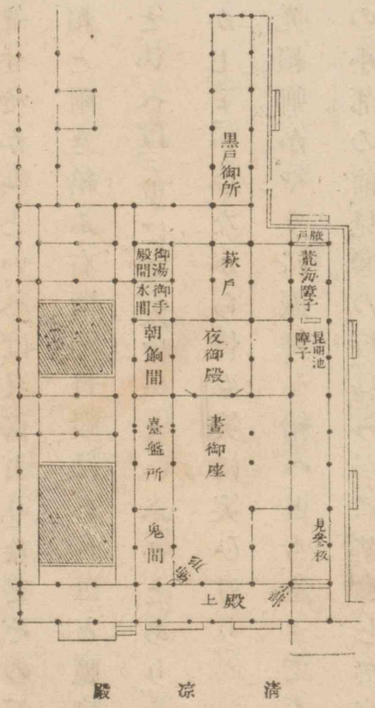
に、「今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ。」と色代して、しづ〳〵と歩み、信頼卿の上にむずと着き給ふ。

*右衛門督信頼

光頼は信頼のためには母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられたり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿、「あな、あさましし。」と見給ふに、光頼卿、下襲の尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらん者をば死罪に行はるべしとやらん承りて、參内するところなり。抑、何事の御諚ぞ。」と問ひけれども、信頼物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て、光頼卿つい立ちて、「悪しう參つて候ひけり。」とて、しづ〳〵と歩み出でられけり。

*除目ありし翌日

庭上に充ち〳〵たる兵どもこれを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日より、多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさゞりつるに、しいだしたることよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれこの人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからん。」と申



(一)共に多田滿仲の子

(二)左兵衛督檢非違使別當藤原惟方

せば、傍なる者の、「昔、賴光(一)・賴信とて、源氏の名將おはしましき。その賴光を打返して光賴と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。」といへば、又、傍より「など、その賴信を打返して信賴と附き給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病におはしますぞ。」といへば、『壁に耳、天に口』といふことあり。　恐ろし〳〵。　聞かじ。」といひながら、皆忍笑に笑ひけり。

光賴卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小蔀の前、見參の板、高らかに踏鳴して立たれたりけるが、荒海障子の北、萩戸の邊に、弟の別當(二)惟方のおはしけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間參じたれども、承り定めたることもなし。　誠やらん、光賴も死罪に行は

(三)少納言藤原通憲入道して信西といふ。

(四)洛東吉田神社の邊

(五)藤原高藤(四)高藤の子定方

るべき人數にてあなる。　傳へ承る如きは、その人皆當時の有識、然るべき人どもなり。　その内に入らんこと、甚だ面目なるべし。　さても、先日、右衛門督が車の尻に乘つて、少納言入道(三)が首實檢のために、神樂岡(四)へ向はれけることは、いかに。以ての外然るべからざる振舞かな。　近衛大將・檢非違使別當は他に異なる重職なり。　その職に居ながら人の車の尻に乘り給ふこと、先蹤もいまだ聞及ばず、當時も大に恥辱なり。　就中、首實檢は甚だ穩便ならず。」と宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかば。」とて、赤面せられたり。

光賴卿重ねて、「こはいかに、勅諚なればとて、存ずる旨を一議申さざるべき。　我等が曩祖勸修寺内大臣・三條(五)右大臣、延喜

の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣又十一代、承り行ふことは皆これ德政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴つて、讒佞の輩にくみせざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝ程の事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人ら待受けて、大勢にてあなる。信賴卿が語らふところの兵そこばくならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をやめぐらすべき。もし、又、火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の

※紀伊國日高郡に在り。

地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかに、いはんや、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、この時にあるべし。右衞門督は御邊に大小事を申しあはすとこそきこゆれ。相構へて〳〵隙を伺ひ、玉體恙なくおはします樣に思案せらるべし。さて、主上は何處におはしますぞ。「黑戸御所に。」「上皇は。」「一本御書所に。」「內侍所は。」「溫明殿に。」「劍璽は何處に。」「夜の御殿に。」と、左衞門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

又、「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは、何者ぞ。」と宣へば、「それには右衞門督住み候へば、その方樣の女房などぞかげろひ候ふらん。」と申されければ、光賴卿聞きもあへ

(一)二條天皇
(二)後白河天皇

ず「世の中は、今はかくごさんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸御所に遷しまゐらせたり。末代なれども、さすがに日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神・正八幡宮は王法をいかが守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝にて未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろ〳〵しげに、憚る所なく口説き給へば、惟方は「人もや聞くらん。」と、よにすさまじげにて立たれたれども、かつは悲しくて、「われ、いかなる宿業によつて、かゝる世に生れ合ひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲みて、うちしをれてぞ出で給ひける。

*許由は隱士なり。堯これに天下を讓らんとせしに許由之を聞きて耳の汚なりとて潁川の水に耳を洗ひたりといふ。

一三　重盛諫言　平家物語

太政入道はかやうに人々數多いましめ置いても、猶心ゆかずや思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に黒絲縅の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島の大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇にはさみ、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色

(一)鎌倉時代の軍記

(二)平清盛

ゆゝしうぞ見えし。「貞能」と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋縅の鎧きて、御前に畏つてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに、貞能、この事いかゞおもふぞ。保元に平右馬助を始として、一門半ば過ぎて新院の御方に參りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の殿の養君にてまし〳〵しかば、旁見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先をかけたりき。これ一つの奉公。次に、平治元年十二月、信頼・義朝が謀叛の時、院・内を取り奉つて大内にたて籠り、天下くらやみとなつたりしにも、入道隨分身を捨てゝ凶徒を追落し、經宗・惟方を召しいましめしに至るまで、君の御爲に既に命を失はんとする事度々

(一)保元元年
(二)清盛の叔父忠正
(三)崇德上皇
(四)崇德上皇の長子重仁親王
(五)清盛の父忠盛
(六)鳥羽法皇
(七)後白河上皇
(八)二條天皇
(九)權大納言藤原經宗
(十)檢非違使別當藤原惟方

に及ぶ。されば、人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思召し捨てさせ給ふべき。それに、成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不當人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすれば、この一門滅さるべきよしの御結構こそ然るべからね。この後も讒奏するものあらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも、益あるまじ。暫く世を鎭めん程、法皇を鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんと思ふは、いかに。その儀ならば、定めて北面の者共が中より矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は、入道、院方の奉公思切つたり。

(一)藤原成親
(二)藤原師光、入道して西光といふ
(三)後白河法皇
(四)京都の南にあり

馬に鞍おかせよ。きせながを取出せ」とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國、急ぎ小松殿(一)へ參つて、「世ははやかう候」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼、はや成親卿の頭の刎ねられたんな。」と宣へば、「その儀にては候はねども、入道殿のおんきせながを召され候上は、侍共も皆打立つて、只今院の御所法住寺殿(二)へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんとは候へども、内々は鎭西の方へ流し參らせんとこそ擬せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣、何に依りて、只今さる事のおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂はしきこともやおはすら

(一) 重盛の邸

(二) 京都下京區瓦町三十三間堂の東にあり。

んとて、急ぎ車を飛ばせて西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の内へさし入つて見給ふに、入道腹卷を着給ふ上、一門の卿相・雲客數十人、各〻いろ〳〵の直垂に思ひ〳〵の鎧着て、中門の廊に二行に着かれたり。その外、諸國の受領・衛府・諸司などは、緣に居こぼれ、庭にもひしとなみ居たり。旗竿ども引きそばめ〳〵、馬の腹帶をかため、冑の緒をしめ、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿烏帽子直衣に、大紋の指貫のそば取つてさやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、「あはれ、例の内府が世をへうする樣に振舞ふものかな。大きに諫めばや。」とは思はれけれども、流石

(一)殺生戒　偸盜戒　邪婬戒　妄語戒　飲酒戒
(二)仁義禮智信

子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を案らず、禮義を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を着て對はんこと、流石おもはゆう、はづかしうや思はれけん、障子を少し引立てゝ、腹卷の上に素絹の衣をあわてぎに着給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隱さうと、頻りに衣を引違へ〳〵ぞし給ひける。

大臣は舍弟宗盛卿の座上につき給ふ。入道宣ひ出さるゝ事もなく、大臣もまた申上げらるゝ旨もなし。

やゝあつて、入道宣ひけるは、「あの成親卿が謀叛は事の數にも候はず。一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞなかれける。入道「さて、いかにや、いかに。」とあきれ給へば、やゝあつて、大臣涙を押へて、「この仰承り候に、御運は早、末になりぬと覺え候。人運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。又、御有樣を見參らせ候に、更に現とも覺え候はず。流石、我が朝は、邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしより以來、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふ事、禮義を背くに非ずや。就中、御出家の御身なり、忽ちに法衣を脱ぎすてゝ、甲冑を鎧ひ弓箭を帶しましまさん事、内には破戒無慙の罪を招くの

みならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。旁、恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。

まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、是なり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下、王土に非ずといふことなく、率土の濱、王臣に非ずといふことなし。されば、かの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命背き難き禮義をば存知すとこそ承れ。いかに、いはんや、先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府・槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園盡く一家の進止たり。是、希代の朝恩に非ずや。今此等の莫大の御恩を思召し忘れさせ給ひて、亂りがはしく法皇を傾け參らせさせ給はん事、天照大神・正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ、日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。然れば、君の思召し立たせ給ふ所、道理半ばなきにあらず。中にも、この一門は、代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎭めしことは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇條御憲法に「人皆心有り。心各執有り。彼を是し、我を非し、我を是し、彼を非す。是非の理、誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くにして、端なし。爰を以て、縱ひ人怒るといふとも、却て我が咎を

（一）許由
（二）伯夷・叔齊

懼れよ。」とこそ見えて候へ。然れども、當家の運命未だ盡きざるによつて、御謀叛已に露れさせ給ひ候ひぬ。その上、仰せ合せらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君如何なる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈〻奉公の忠勤を盡し、民の爲には益〻撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明佛陀感應あらば、君も思召し直すこと、などか候はざるべき。」

君と臣とを比ぶるに、親疎わく方なし。道理と僻事とを並べんに、爭でか道理に附かざるべき。是は尤も君の御理にて候へば、叶はざらんまでも、院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣の大將に至るまで、しかしながら、君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずるに、一入再入の紅にも過ぎたらん。然らば、院中に參り籠り候べし。その儀にて候はば、重盛が身に代り命に代らんと契りたる侍ども少々候らん。これらを召具して院の御所法住寺殿を守護し參らせ候はば、流石、以ての外の御大事でこそ候はんずらめ。

悲しいかな。君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の頂よりも猶高き父の恩、忽ちに忘れなんとす。痛ま

須彌山。高さ八萬四千由旬あり といふ。

しいかな。不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には已に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退、維谷れり。是非、いかにも辨へがたし。申し受くる所詮は、唯重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず、又、院中をも守護し參らすべからず。されば、かの蕭何は大功かたへに越えたるに依つて、官大相國に至り、劍を帶し沓を履きながら殿上へ昇ることを許されしかども、叡慮に背く事ありしかば、高祖重う戒めて、深う罪せられにき。斯樣の先蹤を思へば、富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁、極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり、再び實なる木はその根必ず傷む

*漢高祖の重臣

と見えて候。心細うこそ候へ。何時までか命生きて亂れん世をも見候べき。唯末代に生を受けてかゝる憂目に遭ひ候重盛が果報の程こそつたなう候へ。只今も侍一人に仰せつけられ、御壺の內へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんずることは、いと易きほどの御事でこそ候はんずらめ。これを各、聞き給へ。」とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口說き、さめ〴〵と泣き給へば、その座に並みゐ給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。

一四　花のやど

後鳥羽院御製

[illegible]

藤原良經

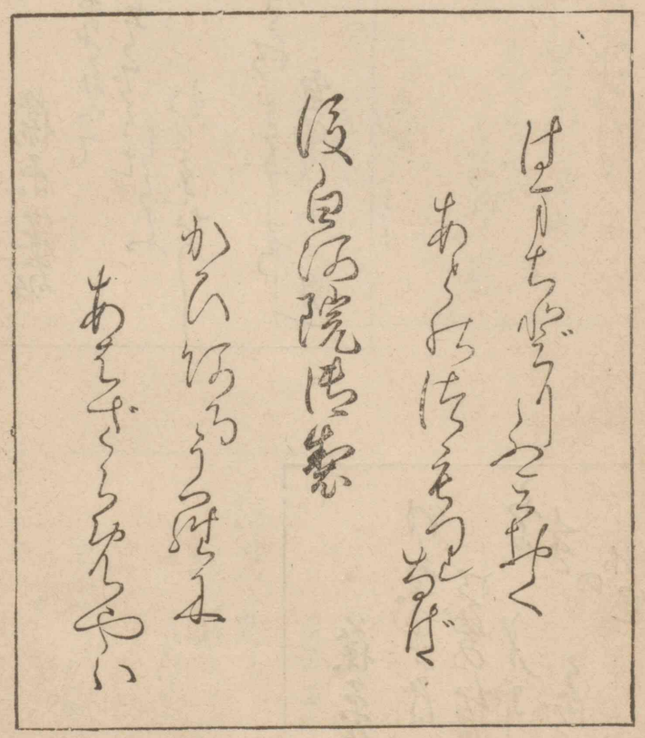
[illegible]

藤原定家

[illegible]

藤原俊成

[illegible]



一五　大原御幸　　平家物語

(一)後白河法皇。高倉天皇の御父　(二)清盛の女徳子。高倉天皇の中宮。安徳天皇の御母　(三)山城國愛宕郡大原村　(四)賀茂の祭。四月中の酉の日に行はる。　(五)左大臣藤原實定　(六)大納言藤原兼雅　(七)權中納言源通親　(八)歌人、清少納言の祖父　(九)山城國愛宕郡靜原の山麓にあり。　(十)後冷泉天皇の皇后藤原教通の女歡子。その舊跡は同郡小野山附近なりと、

かゝりし程に、法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居のおん住ひ、御覽ぜまほしうおぼし召されけれども、如月・彌生のほどは、嵐烈しう、餘寒もいまだ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつらゝもうち解けず。　かくて、春すぎ夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、大原の奥へ御幸なる。忍びの御幸なりけれども、供奉の人々には、後德大寺・花山院・土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々さぶらひけり。鞍馬通りの御幸なりければ、かの清原の深養父が補陀落寺、小野の皇太皇后の舊跡、叡覽あつて、それより御輿にぞ召さ

れける。

遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり。　青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜まるゝ。　頃は卯月二十日あまりの事なれば、夏草の茂みが末をわけ入らせ給ふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡たえたる程もおぼし召し知られて、あはれなり。

西の山の麓に、一宇の御堂あり。　卽ち、寂光院是なり。　ふるうつくりなせる泉水・木立、よしあるさまの處なり。　「甍破れては霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燭を挑ぐ」とも、かやうの處をや申すべき。　庭の若草茂りあひ、青柳絲をみだりつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。

(一)大原村大字草生にあり。
(二)出典未詳

中島の松にかゝれる藤波のうら紫に咲ける色、青葉まじりの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重たつ雲のたえ間より、山時鳥の一聲も、君のみゆきを待ち顏なり。　法皇これを叡覽あつて、かくぞ遊ばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて、
　　波の花こそさかりなりけれ。

ふりにける岩の絕え間より落ち來る水の音さへ故びよしある處なり。　綠羅の垣、翠黛の山、繪に書くとも、筆も及び難し。　さて、女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・朝顏這ひかかり、しのぶ交りの萱草。　瓢簞屢空し、草顏淵が巷に滋し、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕すともいひつべし。　板の葺

(一)橘直幹が申文の句。和漢朗詠集に出づ。
(二)共に孔子の高弟。

き目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野べ。いさゝを笹に風さわぎ、世に立たぬ身のならひとて、うきふしげき竹柱、都の方の言傳は間遠に結へるませ垣や、わづかにことゝふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音。これらが音づれならでは、まさきのかづら、青葛、くる人稀なる處なり。

法皇「人やある、人やある。」と召されけれども、おんいらへ申すものもなし。やゝあつて、老い衰へたる尼一人參りたり。女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」とおほせければ、「この上の山へ、花摘みに入らせ給ひて候。」と申す。「さこそ世をいとふ

殺生戒　偸盜戒　邪淫戒　妄語戒　飲酒戒　不殺生戒　不偸盜　不邪淫　不妄語　不惡口　不兩舌　不綺語　不貪欲　不嗔恚　不邪見

御習といひながら、さやうのことにつかへ奉るべき人もなきにや。おんいたはしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒十善の御果報盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜ませ給ひ候ふべき。因果經には、欲知過去因見其現在果、欲知未來果、見其現在因と說かれたり。過去未來の因果を、かねて悟らせ給ひなば、つゆ〳〵、御歎きあるべからず。」昔、悉達太子は、十九にて伽耶城を出で、檀特山の麓にて、木の葉を聯ねて膚を隱し、嶺に上つて薪を取り、谷に下りて水を掬び、難行苦行の功に依つてこそ、遂に成等正覺し給ひき。」とぞ申しける。この尼の有樣を御覽ずれば、身は、絹・布の分も見え

ぬ物を結び集めてぞ着たりける。あの有様にてもかやうのこと申す不思議さよとおぼしめして、「抑、汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、この尼さめ〴〵と泣いて、暫しは御返事にも及ばず。やゝあつて、涙をおさへて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西がむすめ、阿波、内侍と申す者にて候なり。母は紀*、伊の二位。さしも御いとほしみ深う候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身のおとろへぬる程おもひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。」とて、袖を顏におしあてゝ、忍びあへぬ様、目もあてられず。法皇「げにも、汝は阿波の内侍にてあるごさんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、唯夢とのみこそおぼしめせ。」と

*名は朝子

て、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿・殿上人も、「不思議の事申す尼かな。」と思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、各感じあはれける。

さて、彼方此方を叡覽あるに、庭の千草露重く籬に倒れかゝりつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立つ隙も見え分かず。さて、女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子をひきあけて叡覽あるに、一間には、來迎の三尊(一)おはします。中尊の御手には、五色の絲を懸けられたり。左に、普賢の畫像・右に、善導(二)和尚・並に、先帝(三)の御影をかけ、八軸(四)の妙文、九帖(五)の御書もおかれたり。蘭麝の薫にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。彼の淨名居士(六)の方丈の室のうちに三萬二千の床を並べ、十方の

(一)中、彌陀、右、觀音、左、勢至
(二)唐ノ名僧にて淨土の教義を鼓吹せし人
(三)女院天皇
(四)法華經八卷
(五)善導ノ觀無量壽經の疏九卷
(六)維摩羅詰のこと維摩居士ともいい

ふ、釋迦と同時代の人

(一)法名寂昭、入宋して歿す。

(二)和漢朗詠集に出づ。

諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。障子には、諸經の要文ども、色紙に書いて、處々におされたり。その中に、(一)大江定基法師が清涼山にして詠じたりけん、(二)笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前とも書かれたり。すこしひきのけて、女院の御歌とおぼしくて、

思ひきや、み山の奥にすまひして、
雲居の月をよそに見んとは

さて、傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に麻の御衣・紙の衾なんど懸けられたり。さしも、本朝・漢土の妙なる類數を盡し、綾羅錦繡の粧もさながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり

*平重衡の妻

見奉りし事ども、今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。

やゝあつて、上の山より、濃き墨染の衣着たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝ、おりわづらひたる様なりけり。法皇「あれは、いかなる者ぞ」と仰せければ、老尼涙をおさへて、「花筐臂にかけ、岩躑躅取具して持たせ給ひて候は、女院にわたらせ給ひ候。爪木に蕨折添へて持ちたるは、鳥飼、中納言維實が女五條、大納言國綱の養子、先帝の御乳母、*大納言、佐局」と申しもあへず、泣きけり。法皇涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、皆袖をぞ濡されける。女院は世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有様を見えまゐらせんずらん愧しさよ、消えも失せばやとおぼしめせども、かひぞなき。宵々毎の

閼伽の水、掬ぶ袂もしをるゝに、曉起きの袖のうへ、山路の露も滋くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へも還らせ給はず、又、御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたる處に、內侍の尼參りつゝ、花筐をば賜はりけり。

一六　山吹の花

（上）

落合直文

人の子よ。母を持つ子よ。母あらば、
たびにないでそ。吾に悔あり。

歌のふみ二卷三卷座に散りて、

あるじは見えず、山吹の花。

佐々木信綱

法の師に法のこと聽き、馬方に
馬のことをきく今日の旅かな。

一年の終の夜半の尼寺の
讀經の聲のしづかなるかな。

與謝野寛*

*鐵幹と號す。落合直文門下、歌人。

近江より玉繭買ひにこし人も
まじりて踊る秋の夜の月。

わが船のけぶりの末に星見えて
夕汐高し、天草の灘。

尾上柴舟

石一つ投ぐれば遠くこだまして、
冬の林に立つ鳥もなし。

わが妻の少しおちゐてねたる間に
貧しき食事するがわびしさ。

金子薫園(一)

月空にのこれり、露のしろ〳〵と
野のいづこにも動きわたるかな。

牛のゆく白川道の水車、
かたりことりといとまあるかな。

與謝野晶子(二)

(一)歌人

(二)與謝野寛の妻、歌人。

鹿が谷、尼は磬うつ、椿ちる、
うぐひす啼きて、春の日くれぬ。

ぬしや誰。ねぶの木かげの釣床の
網のめもるゝ水色のきぬ。

(下)

水馬かさなりあうて流れけり。　內藤鳴雪

滿園の露日に動く、五月晴。　正岡子規

菜の花や、岡に登れば町遠き。　高濱虛子

麗朶の雪ほの〳〵白き干潟かな。　河東碧梧桐

橋朽ちて、杭一二本、みづすまし。　大野洒竹

白魚のうまるゝ夜なり、朧月。　藤井紫影

寺荒れて、仁王にせまる若葉かな。　佐々醒雪

西瓜太郎躍り出でよと、割つてけり。　沼波瓊音

一七　カイゼルの帝國主義

山口小太郎(一)

(二)ホーエンツォルレルン家は常に能く時代の大勢を達觀すとは、(三)カイゼルの常套語なり。實に、ホーエンツォルレルン家の歴代は、民をして依らしむべく知らしむべからずとの方針を執り、國民は王室の指導に依つて動くべきものなるを主張し、自ら國是を定め、國民をして之に追隨せしめ來りしが、未だ曾て是がために保守頑冥の弊に陷りしことなく、能く國民をして進むべき所に進ましめたり。此の如きは、

(一)東京外國語學校教授、大正六年歿す。

(二)今の獨逸皇帝の家、フリードリッヒ一世（1417—1440）を祖とす。第十二代フリードリッヒ一世（1701）始めて普魯西王となり、第十八代ウイルヘルム一世（1871）始めて獨逸皇帝となり、フリードリッヒ三世を經て現皇帝ウイルヘルム二世に及べり。

(三)皇帝といふことは現皇帝ウイルヘルム二世を指す。

畢竟彼等が高處に立ちて、世界の大勢を達觀し、國民をして能く此の大勢に順應せしめたる爲にして、カイゼルが家長的施政を以て自己の理想なりとなし、此の如き國家組織が獨逸をして國際競爭場裏の勝利者たらしむる唯一の方法なり、となすも、畢竟、此等の實例を知れるが爲なり。而して、これ獨り內治問題に於て然るのみならず、外交に於ても亦同樣なり。以下、少しくカイゼルの對外思想に就いて研究するところあらん。

獨逸は已に普佛戰爭により(*)て歐洲に於ける地位をつくり、

カイゼル

*1870九月セダン陣落、佛帝ナポレオン三世降伏、獨軍巴里を包圍す、1871一月巴里陷落、ウイルヘルム一世巴里ベルサイヌの宮殿に於て、獨逸皇帝の位に即く式を擧ぐ。佛國、アルサス、ローレン、二州を獨逸に割讓す。

且、國內に於ける統一をも成したれば、今後は、更に他の方面に向つて、種類の異なる侵略を試みざるべからずとは、カイゼルの根本思想なり。即ち、彼は商工業を振興し、經濟的發展と世界市場の平和的侵略とに全力を傾注せんとす。

普魯西は農業國なり、大地主たる貴族の跋扈する國なり。而して、大地主は農業あるを知つて、商工業の貴ぶべき所以を知らず。然るに、此の間に人となり、凡ての點に於て全然普魯西の一貴族たるカイゼルが、能く、重農の弊に陷らず、商工を以て國本となさざるべからざる所以を了解せしは、頗る卓見なりといふべし。

彼が貴族と軍隊とを以て王位の基礎たる銅の岩なりとい

(一)大不列顛國
(二)大日耳曼國

ひしは、吾人の已に知る所なり。されど、彼はこれあるが爲に、彼等の跋扈を許さず。嘗て、中歐の運河の開鑿に關して彼等と商工民との間に激烈なる論爭を生ぜしことあり。彼、乃ち、商工民の主張を以て正當なりとし、若し普魯西の農民にして中歐大運河の開鑿に反對せば、つゆ容赦せざるべしといへり。

英人は、數百年に亙りて尨大なる植民地を支配し來れる結果、遂に(一)グレート、ブリテンといふ思想に達し、國民は知らず識らず世界的となれり。然れども、獨逸人は、昨日までも、無數の小邦に分れて、蝸牛角上の爭を事とせしものなり。彼等をして(二)グレート、ジャーマニーといふ觀念を抱かしめん

ことは一朝一夕の事業にあらず。是に於てか、カイゼルは、まづ、國民に對して大獨逸といふ思想を鼓吹する必要を認めたり。

*千八百九十六年一月十八日は、獨逸建國二十五年祭の行はれし日なり。宮中に盛大なる宴會あり。宴酣にしてカイゼルは次の如き演說をなせり。

獨逸帝國は世界帝國となれり。世界到る處、獨逸人を見ざることなく、獨逸の物產・獨逸の科學は遠く海外に及び、獨逸の海上貿易は年々數十億金を算す。此の大獨逸を永久歐羅巴獨逸に附屬せしめざるべからず。」と。

千八百九十一年一月七日、遞信次官に與へし書に曰く、

*明治二十九年

世界は十九世紀の末葉に至りて貿易時代に入れり。貿易は國境を破壞し、國際間に新しき關係を生ぜしめたり。と。

獨逸の有する陸軍は歐羅巴獨逸の防備には十分なり。然れども、カイゼルの所謂世界的帝國の軍備には更に有力なる艦隊を要す。彼が海軍擴張を絕叫せしは實に此の時なり。彼は、內治問題に於て國民が彼の下に一致協同の動作をなさんことを要求せしが如く、外交問題に於ても、全獨逸人が一個の集團となつて、世界的大戰爭に參加せんことを希望せり。

千八百九十九年十月十八日、*ハンブルグに軍艦カール大帝

*獨逸西北部エルベ河口に在る獨立大都市。

の進水式あり。彼乃ち曰く、

海軍の對外貿易發展の上に缺くべからざることは、いふまでもなし。これに關する獨逸人の思想は、頃者稍進歩の跡を示すに至れるが、尙頗る幼稚なるを免れず。悲しいかな、獨逸人は黨爭のために精力の大部分を消耗し、世界的問題に對しては常に他國に機先を制せらる。世界は最近二三年間に於て全然その趨勢を變じたり。我等をしてまづ世界の大勢を觀察せしめよ。老帝國は衰頽し、新帝國は各處に勃興し、數年前まで世人の注意を惹かざりし東亞の一民族は一朝にして大邦の列に加はり、他の諸國に對して激しき競爭を開始するに至れり。是、人

*日本を指せるならん。

類の文明が最近に至りて著しき進歩を遂げ、國際關係・及び、貿易關係の變動が頗る敏活となり、古代に於て數十年を要せしことも數月にして成就せらるゝが爲なり。されば、獨逸帝國・及び、獨逸國民の任務は甚だしく重且大を加へ、朕・及び、朕の政府の負擔は著しく增加せり。若し國民が依然として黨爭を事とし、一致して外に當るなくんば、國家の前途甚だ寒心に堪へざるなり。

國民はまづ黨爭を廢し、黨の利益の爲に國民一般の幸福を犧牲とし政府の施政に對して放縱なる論議を事とするが如きことあるべからず。我が海軍はこれらの黨爭の爲に進歩を沮害せられたり。朕は、卽位後八年の間、熱

心に海軍の擴張を主張したれども、國民は漫罵と嘲笑とを以て之に應へたり。若し、當時、國民が朕の要求を容れて、直ちに海軍擴張に從事したらんには獨逸の海上權及び、貿易の發展は、恐らくは、今日の比にあらざるべし。遮莫、獨逸人の愛國心は未だ全然消耗せじ。彼等はやがて奮起すべし。(一)先帝陛下の記念祭に於ける國民の熱狂は能く之を證せり。

先帝陛下はビスマーク等の忠臣と共に(二)祖父陛下を助け、獨逸帝國を建設して、我等に讓與し給ひき。我等は、これによりて、我等の祖先が夢想し、わが詩人が豫言・謳歌せし獨逸帝國を面前に見るを得るに至れり。されば、今より

(一)フリードリッヒ三世

(二)ウィルヘルム一世

して、吾人の努むべきは、この大なる建設物の各部に對して徒らに批評を加へ、或は、不平を鳴らすに非ずして、十月の先帝祭に於ける燄の如き熱情を以て、更に第二の目的に向つて突進し、國際間に於ける獨逸の地位を自覺し、列國の形勢に注意し、黨爭を廢して一致協同の實を擧ぐべし。かくて、始めて、獨逸國民はハンザ*の事業を進行せしむるを得べし。これ朕の願なり。

カイゼルの平和政策は、必須條件として、軍隊的に鞏固なる獨逸を豫想せり。即ち、彼はこれによりて、隣邦をして禍心を抱く機會なからしめ、時によりては、平和を強制せんとするなり。かくして、列强より畏敬せられ各國より信認せら

*紀元千二百五十年頃に北獨逸の大市數十が同盟を作りて各軍團を置き封建諸侯及び海賊等に對して各ゝ通商貿易及び農業工業漁業を防護したるを指す。

る丶獨逸は、卽ち彼の理想的國家にして、彼は之を以て獨逸の世界的霸權なりと稱せり。

カイゼルのいふところの大獨逸は、畢竟此の如きものなり。獨逸は千八百七十年の戰役*普佛戰爭によりて今日の地位を作りき。獨逸の世界盟主の霸權はこれに依りて一部分の成就を見き。今日以後の獨逸は海外に於て更に有力なる勢力を得ざるべからず。世界盟主の霸權は、此の如くにして、始めて完成の域に達すべし。されば、此の如きは畢竟陸軍力の能くすべき所に非ず。たゞ強大なる海軍あつて始めて其の目的は達せらるべし。カイゼルの使命は卽ち此の點に在り。ウィルヘルム一世は陸軍に依りて歐洲に於ける獨逸

の地位を作りき。カイゼルは卽ち海軍に依りて世界に於ける獨逸の地位を作らざるべからざるなり。

千九百年七月三日、(一)ウィルヘルムスハーフェンに、甲鐵艦ウィッテルスバッハの進水式あり。席上、(二)バヴァリヤ皇族ルプレヒトの祝辭あり。カイゼル、乃ち、これに答ふらく、

大洋の浪は獨逸の門戸を叩き、獨逸國民の大國民として世界の政事的舞臺に上らんことを要求す。今や、世界は海上に於ても、異域に於ても、獨逸及び、獨逸皇帝を無視する能はざるに至れり。三十年前の獨逸は幾多の小邦に、分れ、蝸牛角上の爭に囚はれて、國際的問題の解決に參與することを忘れたりき。此の如きは朕の意にあらず。

(一) 獨逸西北隅の港
(二) 獨逸南部にある聯邦中の一王國

今後、國際的紛爭の生ずる場合あらば、獨逸は世界に於ける強國たる地位に鑑み、決して獨逸の勢力を無視せしむべからず。これが爲に、時に斷乎たる手段を執るは、朕の義務にして、又、朕の光榮ある特權なり。而して、朕は信ず、此の如き場合には、獨逸の諸侯・及び、國民は一團となりて朕の背後に立つべきことを。

（「獨逸皇帝」）

一八　潜航艇とその活動

水面の下を潜航し敵艦に肉薄して之を擊沈せんとする思想は、遠き昔に根ざしたるが、科學の進歩せざりし時に在りては、其の希望を達するに由なかりしこと、恰も空中に於ける飛行機と同じかりき。大正より五十年前、文久・元治の頃、米國に南北戰爭あり、南軍は潜航艇を以て北軍の艦船を爆沈せしことあり。これ蓋し其の實用に供せられし始なるべし。然れども、當時未だ魚形水雷の發明なかりし故、艇は敵艦の水線下に潜航して、爆發物を敷設し、一定の時間後爆發せしむる趣向なりしなり。

現代の潜航艇は魚形水雷の發明ありて後の考案に出づる者なり。最初の設計は明治十八年佛國の海軍に出でたれど、其の長さ僅かに十六呎半にして、尚雛形に過ぎざりき。明治三十五年米國のホルランド式出づるに至りて、實用に適すとの信念初めて立ちたり。即ち、現代潜航艇の性能を

約言すれば、敵に發見せらるゝことなく、白晝と雖も、魚形水雷襲擊を行ひ得ること、これなり。　爾來、種々の研究・實驗漸く積り、大正の世界戰爭に獨逸が潛航艇を以て極力活動するに至りて、其の威力十分に發揮せられたり。　獨逸は潛航艇を建造すること最も遲かりしにも拘らず、密かに各國の長所を採りて、最も新しく、最も進歩せるゲルマニア型を成せりと云ふ。　他の發明を取り、科學の力を以て之を擴充し進歩せしむるは、由來獨逸の長所なり。

潛航艇の構造・能力等に關しては、列國皆之を秘密にするを以て、委しくは之を知ること能はざるが故に、茲にはたゞ其の概畧のみを語るべし。

潛航艇の外觀は魚形水雷の如く、葉卷煙草形にして、其の橫斷面は殆ど圓形・又は、半圓形なり。　近來二重船殼にしたる者は、外部の形狀他の艦艇と殆ど同じ。　艇が水面下に在るときは、潛望鏡を水面上に出して、上界を視察す。

潛航艇の原動力は、ガソリン・又は、重油の發動機を用ひ、水中潛航には電池を用ひて、之を起す。　潛航中の空氣供給は、壓搾空氣を貯藏して、之を爲す。　一般に、艇體小にして、發動機大部分を占め、艇員に休養の場處を與ふること少なく、且、空氣の出入不十分なる等の爲、艇員の困苦尋常ならず。

現今、潛航艇の大きさは大抵四百噸より一千噸に至り、速力は水上にて十四乃至二十節、水中にて十乃至十四節なり。

目下獨・米にて建造中なる者には、更に大なる者あり。航續力・即ち、燃料の補給を要せずして航海を繼續し得る最大距離は、現今、水中に於て百二三十浬に過ぎずと雖も、水上航行に於ては三千五百浬乃至五千五百浬に達す。大正五年六月獨逸の潜航商艇ドイッチランドが、英國の封鎖を脱して、十六日間三千八百浬の航程を經て米國のボルチモーア(一)に達し、再び自國のブレーメン(二)に歸着せし、勇氣と技倆とは、敵も味方も歎稱する所なりき。

余は潜航艇の發達と形狀・性質とを說かんが爲に思はず多くの辭を費したり。これより其の活動に就きて語らん。

大正三年、世界戰爭の歐洲に幕を開きしや、英國は當然獨逸

(一) 北米合衆國東岸ノ港。フイラデルフイアの南にあり。
(二) 獨逸の西北部ウエーゼル河の下流に在る港。

方面の海を封鎖したり。獨逸は其の海軍力遠く英國に及ばざるを知る故に、港灣に蟄伏して、敢て出でず、潜航艇・及び、機械水雷等を以て英の艦隊を奇襲し、一艦、又、一艦、逐次に其の勢力を殺ぎ、彼我對等となるに至りて初めて一大決戰を試みんとせり。當時、潜航艇に對する警戒法・及び、防禦法未だ備らざりければ、獨逸の作戰圖に中り、英國の堅艦續々と海底に葬られ、甚だしきは一時間一艦の割を以て三艦を擊沈せらるゝに至りしかば、世を擧げて潜航艇の威力の絶大なるに驚けり。然れども、警戒・防禦の術亦研究せられ、大正四年に入りては、其の被害俄かに減少せり。

かくて、獨逸は依然として制海權を得ざりければ、國内の物

資漸く乏しくなり、政府は之が經濟を行はんが爲に食品官營の制を始めたり。由來食品は條件付戰時禁制品なるが、獨逸の官營制度は英國をして絶對的禁制品と認めしむるに至り、英國はこゝに一切の食品の輸入を阻止せり。是に於て、獨逸は之を英國が獨逸國民をして餓死せしむる所爲なりとし、其の報復として、英國近海に在る一切の敵國船舶を擊沈するを聲明し、潜航艇を以て商船の擊沈を開始せり。加之、獨逸の亂暴なる、敵國が中立國旗を濫用するを口實として、往々中立國の船舶を擊沈せり。かくして、大正三年八月より五年十二月に至るまでに、獨逸潜航艇が擊沈せし所の各國船舶は、合計約二千隻、四百萬噸に及び、而して、英國の船舶其の半に居り。近來英國が物資の缺乏・食品の暴騰に苦しめるは、主として船舶の軍用徵發に因ると雖も、獨逸潜航艇が奮鬪の力亦與つて多しとす。獨艇は、又、詭計に富み、甚だしきは無線電信を以て難船の警電を發し、救助に來る船舶を襲ふことあり。是等の心理は吾等日本人の到底理解し能はざる所なり。

此の間に於て、大正四年五月、獨艇は英國汽船ルシタニア號を擊沈して、米國人百餘名を溺死せしめたり。米國政府は獨逸に抗議し、再三交渉したる後、米國船・並に、米國人の保護に就いて或る保障を得たり。然るに、翌年三月、米國汽船サセックス號擊沈せられければ、米國の輿論沸騰し、國交殆ど

斷絶せんとせしが、獨逸は米國の多くの要求を容れ、今後商船を擊沈するに、苟も武裝なく、又、逃走し、若しくは、抵抗を試みざる者は、無警告に擊沈せざるべきを約して、事止みぬ。

かくて、大正六年一月、英國が更に封鎖を嚴にするに至りて、獨逸は英・佛・伊三國海岸及び、地中海東部の封鎖を嚴行し、三月一日以後は如何なる船舶に對しても警告を與へずして擊沈すべき旨を各中立國に通告せり。こゝに於て、米國は遂に米獨國交斷絶を宣明し、四月六日獨逸に對して宣戰を布告せり。

此の如く、獨艇は北海に地中海に跳梁・跋扈を極めたり。我が海軍艦隊も地中海に出動して、英・佛・伊の海軍と共同して、

往々獨艇を擊沈す。然れども、潛航艇は擊沈と自沈と辨別し難きことあるを以て、確かに其の消息を知るを得ず。

とにかくに、潛航艇は現今の武器中最も畏るべき者の一なり。只其の最大弱點は水中に於ける速力の小にして、敵の艦船を追跡して擊沈すること能はず、便宜の海中に潛み居て、機を待つて襲擊するに過ぎざる事なり。然るに、最近米國にネッフ式といふ機關考案せられ、水中速力の優秀なる者近々建造せらるべしといふ。果して然らば、潛航艇の畏るべき者更に畏るべきを加へ、將來艦船に對する最大の威嚇となるべし。されば、文明は或る意味に於て骨惜しみの進歩と云ふべきのみならず、又、殘忍の進歩と云ふことを得

長州へ西走した人、元治元年四月赤門關にて斃ず。贈正四位。

京都の商人の子、野々口隆正に學ぶ。文久四年七月獄中に斬らる。贈正五位。

べからん。

一九　水つくかばね

錦小路頼德

世の人はよいへかくいへ其のたゝん
つゝみ堤は神ぞしづめる

吉尾郁子

あまれ世の事あらいその浪たゝば
水つくかばねあらはるゝ

京都清水寺の僧、安政五年十月鹿兒島灣に投じて死す。贈正四位。

美濃の人、京都に住み江戸に移り、又京都に復る。安政五年九月病歿す。贈正四位。

若狹小濱藩矢部某の子、京都に住む。安政六年九月江戸の獄中にて病歿す。贈正四位。

僧　月照

大君のゐるまはりの情しかん
さらぬまのせとを分ぬしづむとも

梁川星巖

海山や民をそらとゝ思ふかな
わろ諸をてゝ思ふすん

梅田雲濱

かつりそ草のこ穂を知りがほ
こぼすかなるこ霧ぬるる里

長州藩吉田大助の養子、安政六年十月江戸の獄に於て死刑に處せらる。贈正四位。

吉田松陰

九重のなやむみくるまおすほそて
まもる屠蘇を飲こそすれ

攝津の人。文久二年大和の義擧に加る。元治元年二月京都の獄中に斬らる。贈從四位。

林光平

さげつる刀いと重のもちかへり
火も水も入んとぞおもふ

福岡藩士。生野に義旗を擧げて成らず、元治元年七月京都の獄中に斬らる。贈正四位。

平野國臣

蝦夷地やゆきて沒るとうちしめ
帆綱もみえぬ代まちてん

水戸藩士。筑波山に據りて事を擧ぐ。元治二年二月斬に處せらる。贈正四位。

武田耕雲齋

いざさらば かりくらべん郭公
君をうらまぬなるあるかの

清川八郎

吹きおろせ富士の高根の太古風
男ぎうみぞのちりはらはん

羽後國莊内の人。文久三年四月江戸赤羽橋近傍にて暗殺せらる。贈正四位。

（維新志士遺芳帖）

二〇　日本の天職

大西祝*

*操山と號す。文學博士、哲學者、明治三十三年歿す。

世界の文明は之を全體より觀察すれば、年を逐うて進歩し發展す。而して、各國歴史の河流は、遲速の別こそあれ、遂には世界歴史といふ一大海に朝宗する運命を有するなり。唯其の世界の文明に力を致すに於て各國必ずしもその趣を一にせず。往昔、猶太人は地上に神の王國を建つるを以てその覺悟とし、希臘人は文藝・學術を傳播するを以てその天職とせり。羅馬は世界の帝王を以て自ら任じ、蠻夷の襲撃を受くる曉に於てなほ世界の女王たる位置を保ち、遂に政權を剝奪せらるゝに及んでは、法王政を建てゝ精神的帝王となり、以て世界に君臨したり。近世の歐米人を見るに、英人は、己が運命は海上權を掌握し、遠隔の地に植民をなすにありと信じ、米人はその國土を以てあらゆる方面に自主自由を發達せしむる舞臺となし、獨人は科學・及び、政治の上より世界に一大寄與をなすを以て其の抱負とし、佛人は人間的の思想感情を世界に弘むるを以てその任務とするが如し。

日本は世界の文明に對して如何なる寄與をなすべきか。

日本國民は世界に對して如何なる抱負を有すべきか。これ今日の識者・先覺が深思熟慮すべき一大問題なり。世界の大勢は日本人をして如何なる事を世界に宣傳せしめんとするか。大勢は無聲・無形なり。識者・先覺は大勢を悟了し、これをして聲あらしめ、形あらしめざるべからず。もし

偉大なる先覺ありて、この大勢が言はんと欲して言ふ能はざるところを國民に宣傳するあらんか、國民の心は、譬へば、堰かれたる水の堰を開かれたる如く、滔々たる大河となりてその進むべき所に流れ行かん。　我輩は一日千秋の思をして、日本國民將來の覺悟・抱負を宣傳する大指導者の出でんことを希望して已む能はざるなり。

然れども、我輩姑く明治維新時代に立返り、當時の經世憂國の士が自ら任じたる所を見るときは、其の中猶わが國民が今日の覺悟として可なるものあるを發見せずんばあらず。彼等は大義名分を四海に布くを以て日本の抱負とし、權謀術數を去り至誠世界に立つを以て日本の覺悟とし、一視同仁に天地の大道を體し、天に代りて世界の横道を說破し、討伐し、剿誅し、萬國安全の道を示すを以て日本の天職と考へたるなり。　その元氣の壯んなる、人をして覺えず奮起せしむるものあり。　この元氣とこの覺悟とありしが故に、維新の改革は成就して、鎖港攘夷の陋見は打破せられたるなり。維新以來、日本が駸々として進歩し、今日の如く多少の力量を有する國となりしは、實にこの元氣と覺悟とありしが故なり。

我輩は日本人に種々の缺點あるを知る、日本人は猶幾分の修練と困難とを經過せざれば、決して大國民となる能はざるを知る。　然れども、世界中に於て大義名分の爲に熱狂し、

忠誠の爲に一身を拋つこと土芥も啻ならざる民ありとせば、何人もまづ指を日本國民に屈せざるを得ざるべし　至誠の極、或は輕卒の擧動に出で、大事を誤る同胞なきを必せずと雖も、身を殺して仁を爲すに於て極めて敏速に、死して悔なきこと、日本人の如きは、世界國民中多くあらざる所なり。　日本人は道德義務の念に沸騰する國民なりといふとも、誰か然らずといふものあらん。　果して然らば、日本が世界の文明に對して寄與すべき最大なるものは、道德上の教訓には非ざるか。　日本は道德上に於て世界の師表となり、世界より私欲の氾濫を排除する一大任務を有し居るには非ざるか。　日本帝國が開闢以來絕海に孤立し、世界の腐敗の外に超越し、淸潔美麗なる風土山川に薰化せられ、君臣・父子・夫婦・朋友の道正しく、大體上よりいへば、殆ど理想的國家を經營し來りたるもの、他日大に世界の腐敗を掃蕩するがためにはあらざるか。　天下の微弱を扶持・誘掖し、驕傲・無禮を擊肘・壓倒し、世界の私心を根絕し、道德上の帝王となりて世界に君臨するは、日本がその特質上より世界の文明に對してなすべき最大寄與には非ざるか。　我輩は日本が天地大道の化身となりて萬國民を警醒する大抱負・大覺悟をなすべき時機の到來せるを見て、欣喜措く能はざるものなり。

（大西博士全集）

四訂

女子國語讀本卷十

終

大正八年二月二十日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書

明治三十五年一月三日　初版發行
明治三十五年三月十二日　再版發行
明治三十六年三月十日　三版發行
明治三十七年一月十七日　四版發行
明治三十九年二月十九日　五版發行
明治四十年四月八日　六版發行
明治四十年十二月八日　七版發行
明治四十年十一月十三日　八版發行
大正元年十三月一日　九版發行
大正四年一月二十日　十版發行
大正七年二月十七日　十一版發行
大正七年三月十日　十二版發行
大正七年二月十日　刷印正版
大正八年一月十五日　四十版發行

定價
卷一、二、三、各金四拾錢
卷四、四拾五錢、卷五、參拾錢、卷六、參拾五錢
卷七、八、九、十、各金參拾六錢

大正時代
卷一、二、三、各九十錢
卷四、九十二錢
卷五、七十五錢
卷六、七、十、七十錢
卷七、八、九、十、各七十錢
四訂年度定價

不許複製

四訂女子國語讀本全十册

著作者　吉田彌平
同　小島政吉
同　篠田利英
同　岡田正美

印刷兼發行者　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂書籍株式會社
代表者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　原亮一郎
印刷所　東洋印刷株式會社

發賣所　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂書籍株式會社
賣捌所　各府縣特約販賣所

廣島藩士高芝[illegible]
第四學年筆記帳　柃